

## 陸杲『繫觀世音応驗記』訳注稿(二)

佐野 誠子

前号に引き続き『観音応驗記』のうち、梁・陸杲『繫觀世音応驗記』の翻刻・訳注を掲載する。

今回は、第二十一話から第五十話までの翻刻・訳注であり、次号以降に続きを掲載する予定である。また本翻刻・訳注は、第二十一話から第二十七話までは、二〇一三年度後期の東京大学人文社会科学系研究科・文学部の授業での、第二十八話から第五十話までは、二〇一五年度の名古屋大学文学研究科・文学部の授業での成果でもある。第二十一話から第二十七話までの担当者は、居郷桃子、市原靖久、葛西慧紀、千賀由佳、藤重博貴、松本健志、水岡知典、李崢である(五十音順)。第二十八話以降については、授業時の担当者に原稿を作成してもらい、佐野が校閲を行った。補説は学生が執筆した部分と、佐

野が執筆した部分とがある。各話学生が担当した部分の末尾に名前をしるした(所属・学年は、二〇一五年度当時のものである)。

底本は、青蓮院所蔵の『観音応驗記』を東京大学史料編纂所所蔵のマイクロフィルムから紙焼きしたものを用いた。また、これまでに出版されている以下の各校訂本も参考にした。研究・教育のためにマイクロフィルムからの複写及び翻刻を許可してくださった青蓮院に感謝の意を表したい。

★ 牧田諦亮『六朝古逸観世音応驗記の研究』平楽寺書店一九七〇

★ 孫昌武『観世音応驗記三種』中華書局一九九四

凡例は前号を参照されたい。

〔21〕

【本文】

晉義熙中、司馬休之爲會稽。換回庫錢廿萬、遷荊州、遂不還之。郡無簿書、庫吏姓夏、應死、明日見殺。<sup>(3)</sup>今夜夢見一道人、直來其前、語夏「催去」。因覺起、見所住檻北有四尺許開。又見所夢道人、復語「催去」。夏曰「緣械甚重、何由得去」。道人曰「汝已解脫。但便速去。我是觀世音也」。<sup>(4)</sup>夏便自覺無復鎖械、即穿出檻。檻外牆上大有芳判、見道人在芳上行。夏因上就之。比出獄、已曉、亦失向道人。處處藏伏、瞑投宿下駕山。見有數道人共水邊坐。夏先亦知有觀世音、因問曰「觀世音是何處道人」。道人曰「是佛、非世間人也」。得免後、守人遇收、因首、出爲秘書令吏。後歸家作金像、著頸髮中。菜食斷穀、入剡山學道。

【参考資料】

★ なし

【校注】

- (1) 底本は「因」の異体字「囧」に作る。文意により改める。
- (2) 底本は「薄」に作る。文意により改める。
- (3) 底本は「飯」に作る。「殺」の異体字「煞」の書き誤りか。文意により改める
- (4) 底本は「視」に作る。文意により改める。以下同。
- (5) 底本は「墟」のようにも読める。牧田書は「墟」ととる。
- (6) 底本は「政」に作る。文意により改める。牧田書は「攻」ととる。

【書き下し】

晉義熙中、司馬休之會稽と爲る。庫錢廿万を換回して、荊州に遷り、遂に之を還さず。郡に簿書無く、庫吏の姓は夏なるもの、応に死すべくして、明日殺されんとす。今夜夢に一道人を見、直ちに其の前に来たりて、夏に語りて「催し去れ」と。因りて覺めて起くれば、住まる所の檻の北に四尺許り開く有るを見る。又た夢みる所の道人を見、復た語りて「催し去れ」と。夏曰く「械の甚だ重きに縁りて、何に由りてか去るを得ん」と。道人曰く「汝已に解脫せり。但だ便ち速やか

に去れ。我は是れ観世音なり」と。夏便ち自ら復た鎖械無きを覚え、即ち穿ちて檻を出づ。檻外の牆上に大いに芳判有り、道人の芳上に在りて行くを見る。夏因りて上りて之に就く。獄を出づる比ひ、己に曉にして、亦た向きの道人を失ふ。処処に蔵れ伏せ、暝に下駕山に投宿す。数道人の共に水辺に坐する有るを見る。夏先に亦た観世音有るを知れば、因りて問ひて曰く「観世音は是れ何処の道人なるか」と。道人曰く「是れ仏にして、世間の人に非ざるなり」と。免るるを得て後、守人収に遇ひて、因りて首し、出でて秘書令の吏と為る。後に家に歸りて金像を作り、頸髪中に著く。菜食して穀を断ち、剡山に入りて道を学ぶ。

### 【訳】

晋の義熙年間（四〇五―四一八）、司馬休之は会稽（浙江省）の内史となった。倉庫の錢二十万を借りたまま、荊州（湖北省）に異動してしまい、そのお金を返さなかった。郡には、帳簿もなく、倉庫管理の役人であった夏姓のものが、死罪に相当するとして、翌日処刑されることとなった。前日の夜に、一人の僧侶が夢にあらわれ、まっすぐ目の前にやってきて、夏に言った「すぐに立ち去れ」。そこで目が覚めて起きると、いる

ところの監獄の北側が四尺ばかり開いているのが見えた。また夢にみた僧侶があらわれて、もう一度言った「すぐに立ち去れ」。夏は言った「足枷がとてつもなく重いのに、どうして逃げるのができましようか」。僧侶は言った「おまえはすでに抜け出している。ただすぐさま逃げなさい。私は観世音なのだ」。夏はもう鎖がないことに気が付き、そこで、穴を開けて監獄から抜け出た。監獄の外の壁には大きな「芳判」があり、道人が「芳判」の上を行くのを見た。夏もそこで壁に上って僧侶についていった。監獄を出るときには、もう夜が明けていて、僧侶の姿も見失った。あちこちに隠れながら逃げ、日暮れに下駕山に投宿した。数人の僧侶が水辺に一緒に座っているのを見かけた。夏は、観世音が先に進んでいたのを知っていたため、そこで尋ねた「観世音はどちらのお坊様でしょうか」。僧侶は言った「それは仏であって、世間一般のお人ではない」。逃げおおせた後、見張りが捕まり、そこで自首したため、庫吏の疑いは晴れ、秘書令の下役人になった。その後家に帰って金の仏像を造り、頸部の髪の毛に結び付けた。菜食して、穀物を断ち、剡山に入って修行をした。

### 【語注】

★ 司馬休之の字は季預。晋の王族の一人。『晋書』卷三十七、『魏書』卷三十七、『北史』卷二十九に伝あり。会稽

太守、荊州刺史になったことについては、補説参照。

★ 庫錢の倉庫にある金銭や財産。『晋書』卷六十六陶侃伝

「侃遙謂之曰『杜弢爲益州吏、盜用庫錢、父死不奔喪。卿本佳人、何爲隨之也。天下寧有白頭賊乎』（陶）侃遙かに之に謂ひて曰く『杜弢益州の吏と爲りて、庫錢を盗用し、父死すれども喪に奔らず。卿は本と佳人なるに、何

爲れぞ之に隨ふや。天下寧んぞ白頭の賊有らんや』と」。

★ 庫吏の役所の倉庫を看守管理する役人。保管物の欠損があると責任を取らされた。『三国志』卷二十鄧哀王冲伝

「太祖馬鞍在庫、而爲鼠所齧。庫吏懼必死、議欲面縛首罪、猶懼不免（太祖の馬鞍庫に在り、鼠の齧る所と爲る。庫吏必ず死するを懼れ、面縛して罪に首するを欲せんと議

するも、猶ほ免れざるを懼る）」。

★ 今夜その日の夜。梁代頃からよく使われるようになり、漢訳仏典にも多くみられる語。梁簡文帝「望月詩」（『藝文類聚』卷一）「今夜月光來、正上相思臺（今夜月光來たりて、正に相思台に上る）」。

★ 芳判不詳。足跡のようなものを指すか。

★ 下駕山の山の名であろうが詳細不詳。あるいは文の区切りが違ふ可能性がある。

★ 守人監視員。『增一阿含經』「彼長者有七重門。皆有守人不得使乞者詣門（彼の長者に七重の門有り。皆守人有

りて乞者をして門を詣らしむるを得ず）」。

★ 收收容する。捕まえる。

★ 首自首する。

★ 秘書令官職名。書記官。『唐六典』卷十「魏武爲魏王、置秘書令。典尚書奏事、郎中書之任也、兼掌圖書秘記（魏

武魏王と爲り、秘書令を置く。尚書の奏事を典じ、郎中書の任なり、兼ねて圖書秘記を掌る）」。

★ 斷穀穀物の摂取を控えること。補説参照。

★ 剡山浙江省紹興市嵊県にある山。『幽明録』には劉晨・阮肇が剡山で道に迷い、仙女にあう話がある。『高僧伝』

卷四では、于法蘭等が修行した山となっている。

### 【補説】

司馬休之は、『晋書』卷十安帝紀義熙元年（四〇五）三月の記事に、「桓振復襲江陵、荊州刺史司馬休之奔于襄陽（桓振復た江陵を襲ひ、荊州刺史司馬休之襄陽に奔す）」とあり、荊州

刺史であつたことがわかる。『晋書』卷三十七の伝によれば、この敗退によつて、みやこに戻された後に会稽内史とされたとあり、その後再び荊州刺史となっている。義熙十一年（四一五）劉裕に攻められると、後秦にくんだり、劉裕に後秦が滅ぼされると、北魏に投降した。

庫吏が行つた断穀は、本来道教において行われる修行法の一である。村上嘉実「高僧伝の神異」（『六朝思想史研究』平楽寺書店一九七四）では、道教の影響を受けた仏教の神異として、断穀を取りあげ、敦煌出身の单道開のことを紹介する。

## 〔22〕

### 【本文】

道人釋僧洪者、住都下瓦官寺。作丈六銅像、始得作畢。<sup>(2)</sup>于時晉義熙十二年、大禁鑄銅。僧洪未得開模見像、便爲官所收、繫在相府。判奸、罪應入死。<sup>(4)</sup>僧洪便誦念『觀世音經』。得一日、忽夢見其所作像來至獄中。以手摩其頸、問「汝怖不」。僧洪具以事答。像曰「無所憂也」。<sup>(5)</sup>夢中見像胸前方一尺許、銅色焦沸。後遂至出市見殺。<sup>(6)</sup>爾日、府參軍應監刑。<sup>(7)</sup>初喚駕車、而牛絕不肯入、既入便奔、車即粉碎、遂至暝無監。<sup>(8)</sup>更復剋日。因

有判從彭城還、道「若未殺僧洪者、可原」。既出、破模看像、果胸前如夢。此像今在瓦官寺、數禮拜也。

### 【參考資料】

- ★ 金剛寺本「佚名諸菩薩感應抄」（16）
- ★ 『名僧伝』卷二十七
- ★ 『高僧伝』卷十三僧洪伝
- ★ 『弁正論』卷七注所引『冥祥記』
- ★ 『法華伝記』卷五出『高僧伝』
- ◇ 『冥祥記』第一二九条

### 【校注】

- （1）底本は「供」に作る。金剛寺本等により改める。以下同。
- また語注僧洪参照。
- （2）底本は「住」に作る。金剛寺本により改める。
- （3）底本は「故」に作る。金剛寺本等により改める。
- （4）底本は「危」に作る。金剛寺本等により改める。
- （5）底本は「問」に作る。金剛寺本等により改める。
- （6）底本は「飯」に作る。「殺」の異体字「刹」の書き誤りか。金剛寺本等により改める。

(7) 底本は「夜」に作る。金剛寺本等により改める。

(8) 底本は「形」に作る。金剛寺本により改める。

(9) 底本は「冥」に作る。文意により改める。

### 【書き下し】

道人釈僧洪は、都下の瓦官寺に住めり。丈六の銅像を作らんとし、始めて作り畢はるを得たり。時に于て晋義熙十二年、大いに銅を鑄るを禁ず。僧洪未だ模を開きて像を見るを得ずして、便ち官の収むる所と為り、繋がれて相府に在り。奸と判ぜられ、罪応に死に入るべし。僧洪便ち『観世音経』を誦念す。一日日を得て、忽ち夢に其の作る所の像の来たりて獄中に至るを見る。手を以て其の頸を摩し、問ふ「汝怖るるや不<sup>い</sup>や」と。僧洪具さに事を以て答ふ。像曰く「憂ふ所無きなり」と。夢中に像の胸前方一尺許り、銅色にして焦沸するを見る。後遂に市に出でて殺さるるに至る。爾<sup>そ</sup>の日、府の参軍<sup>そ</sup>に刑を監るべし。初め駕車を喚べども、牛絶<sup>た</sup>えて入ることを肯ぜず、既に入れば便ち奔して、車即ち粉碎し、遂に喉<sup>くちき</sup>に至るまで監ること無し。更めて復た日を剋す。判の彭城<sup>ゆ</sup>従<sup>る</sup>り還る有るに因りて、道ふ「若し未だ僧洪を殺さざれば、原

すべし」と。既に出でて、模を破りて像を看れば、果して胸前夢の如し。此の像今瓦官寺に在り、数<sup>しば</sup>ば礼拝するなり。

### 【訳】

僧侶の釈僧洪は、都の瓦官寺に住んでいた。一丈六尺の銅像を作ろうとしていて、やっと完成させた。そのときは晋の義熙十二年（四一六）、銅の鑄造が厳しく禁止された。僧洪はまだ鑄型を壊して像を見ないでいたところ、役人に捕まり、相府にて係留された。犯罪だとみなされ、死刑に処されることとなった。僧洪は『観世音経』を読み上げた。一ヶ月がたち、急に夢に自分が作った像が獄中にやってくるのを見た。仏像は手で僧洪の喉をなせて、問われた「おまえはこわいか」。僧洪はすべて事実を答えた。仏像は「心配することはない」と言った。夢の中で内側に仏像の胸の前一尺四方ばかりのところ、銅色で煮えたぎっているのを見た。その後、市場に出されて処刑されることになった。その日は、府の参軍が刑に立ち会うことになっていた。はじめ車を呼んだが、牛がどうしても入ってこず、入ってきたかと思えば走り回り、車は粉々になつてしまい、日暮れになるまで監督者が不在だった。そこで、改めて処刑の日を決めた。判事が彭城（江蘇省徐州市）か

ら帰ってきて言った「もしまだ僧洪を殺していないのなら、赦免すべきである」。すでに釈放されて、鑄型を壊して仏像を見たところ、思った通り胸の前が夢でみたようになっていた。この仏像は今現在瓦官寺にあり、何度も礼拝をしている。

### 【語注】

★ 僧洪＝僧侶の名。『高僧伝』卷十三に伝あり。『名僧伝』では、底本と同じく「僧供」に作る。金剛寺本では、「洪」に作る。しかし、梁・釈僧祐『出三藏記集』卷十二が目次を引用する『法苑雜縁集』雜図像上卷第八には「瓦官寺釈僧供造丈六金像記第三」とあり、『高僧伝』よりも前の資料では「僧供」に作る方が多かった。ここから紀贇『高僧伝研究』（上海古籍出版社二〇〇九）一五一頁は「僧供」だった可能性が高いとする。

★ 都下＝みやこ建康を指す。〔7〕語注参照。

★ 瓦官寺＝建康にある寺の名。『高僧伝』卷五竺法汰伝「瓦官寺本是河内山玩公墓、爲陶處。晉興寧中、沙門慧力啓乞爲寺、止有堂塔而已。及汰居之、更拓房宇、修立衆業（瓦官寺は本は是れ河内山玩公の墓なりて、陶処と爲る。晉の興寧中〔三六三―三六五〕、沙門慧力啓して乞ひて寺

と爲すも、止<sup>た</sup>だ堂塔有るのみ。汰の之に居るに及び、更めて房宇を拓げ、衆業を修立す」。

★ 丈六＝一丈六尺。これは仏陀の背丈であるといわれる。現在の長さに換算すると四メートル八十五センチメートルになる。

★ 模＝模板。鑄造を行うときの型。

★ 相府＝相国（宰相）の官邸。宋の武帝劉裕を指す。劉裕は、この時点でまだ禪讓を受けておらず、晋の相国の位にあった。補説参照。

★ 奸罪＝罪を犯す。奸（読音<sup>かん</sup>）は侵犯するの意。『春秋左氏伝』昭公二十年「使而失命、召而不來、是再奸也。杜預注」奸、犯也（使して命を失ひ、召して來たらざるは、是れ再び奸するなり。杜預注「奸は、犯なり」）。

★ 入死＝死刑と審判される。『法苑珠林』卷七十七「贓賄狼藉、罪當入死（贓賄狼藉、罪當に死に入るべし）」。

★ 一月日＝一ヶ月分の時間。『宋書』卷六十一江夏文獻王義恭伝「汝一月日自用不可過三十萬（汝一月日自ら用ふること三十万を過ぐべからず）」。

★ 駕車＝家畜にひかせる車。また、そのような車を走らせること。『漢書』卷二十七中之下五行志「日日駕車而出（日

日車に駕して出づ」。

★ 絶々否定の副詞の前に用いて否定の語気を強める副詞。まったく。全然。

★ 判從彭城還『高僧伝』の同話では、この場面で劉裕の名前がでてくる。判は、判事の意であろう。岩波文庫『高僧伝』の注は、当時劉裕が彭城に駐留していたとする。

## 【補説】

『高僧伝』の釈僧洪伝は、この話のみがしるされる。語注でも述べたように、『高僧伝』では、「宋武帝時相國（宋武帝時に相国たり）」とあり、劉裕が登場している。

この鑄造の禁止は、正史等には記録のないものである。『高僧伝』では、晋末とのみ書かれるが、『繫觀世音応驗記』及び『名僧伝』、『弁正論』では、いずれも義熙十二年（四一六）のこととする。牧田書参照。

劉宋時代元嘉年間における鑄造の禁止については、『弘明集』卷十一何尚之「答宋文皇帝讚揚仏教事」元嘉十二年（四三五）に、丹陽尹の蕭摹之が寺社の建立や、銅像の鑄造などは許可制にして、無許可でやった場合は、官で没収するように、という上奏をし、裁可されたということが載っており、『高僧

伝』釈慧嚴伝にも「至元嘉十二年、京尹蕭摹之上啓、請制起寺及鑄像（元嘉十二年に至り、京尹の蕭摹之上啓し、起寺及び鑄像を制するを請ふ）」とある。このような奏上がなされた背景には、仏教の興隆に伴い、寺院の建立、仏像の鑄造が盛んに行われたため、浪費の甚だしかったことがある。塚本善隆「南朝「元嘉治世」の仏教興隆について」（『塚本善隆集』第三卷、大東出版社一九七五）参照。

末尾では、事件の仏像が瓦官寺にあることが記述されるが、たびたび礼拝したのが、一般の人々であったのか、陸奥本人であったのか、記述がはっきりとしない。

## 〔23〕

### 【本文】

王球字叔衡、太原人也。<sup>(1)</sup> 宋元嘉九年、作涪陵郡。坐遭賊失守、繫江陵獄。著一具大鎖、釘之極堅。<sup>(2)</sup> 球在獄中、恒持齋、長誦『觀世音經』。<sup>(3)</sup> 一夜、忽夢已自坐高座上、有道人與其一分經。題云「光明安樂行品並諸菩薩名」。<sup>(4)</sup> 球得便閱讀。忘第一菩薩名、憶第二觀世音、第三是大勢至。皆有國土及名號。因是眠覺、便見雙鎖已解。<sup>(5)</sup> 球知有感應、不復憂怖。因自釘治其鎖、

依常著之。涉三日、事非意便散。<sup>(10)</sup>球元嘉十九年、見爲衛府行參軍、從鎮廣陵。精進甚至。

【参考資料】

★ 金剛寺本「佚名諸菩薩感應抄」(15)

★ 『法苑珠林』卷二十三所引『冥祥記』

★ 『法華伝記』卷五

★ 『太平広記』卷一百十「王球」出『法苑珠林』

◇ 『冥祥記』第八四条

【校注】

(1) 底本は「玉」に作る。金剛寺本等により改める。

(2) 底本は「大」に作る。『法苑珠林』、『太平広記』により改める。

(3) 底本は「宗」に作る。史実により改める。

(4) 底本は「治」に作る。『法苑珠林』等により改める。

(5) 底本は「曹」に作る。『法苑珠林』等により改める。

(6) 底本は「誦」字を欠く。金剛寺本及び『法華伝記』により補う。

(7) 底本は「井」に作る。「菩薩」を一字に略したもの。本文で次にでてくる菩薩も同様。

(8) 底本は「便」字下に「是」字あり。ミセケチがあるため削除した。

(9) 底本は「具」に作る。『法苑珠林』等により改める。

(10) 底本は「沙」に作る。『法華伝記』により改める。牧田書は「經」ととる。

【書き下し】

王球字は叔銜は、太原の人なり。宋元嘉九年涪陵郡と作る<sup>な</sup>。賊に遭ひて守を失ふに坐し、江陵の獄に繋がる。一具の大鎖を著け、之を釘うつこと極めて堅し。球獄中に在りて、恒に齋を持し、『觀世音經』を長らく誦す。一夜、忽ち夢に己の自ら高座の上に坐し、道人有りて其の一分の經を与ふ。題して云ふ『光明安樂行品並びに諸菩薩名』と。球得て便ち開きて読む。第一は菩薩名を忘る、第二は觀世音、第三は是れ大勢至なるを憶ゆ。皆国土及び名号有り。是れに因りて眠りより覚め、便ち双鎖已に解けるを見る。球感應有るを知り、復た憂怖せず。因りて自ら釘うちて其の鎖を治め、常に依りて之を著く。三日に渉り、事意に非ずして便ち散ず。球元嘉十九年、衛府行參軍と為され、広陵を鎮するに従ふ。精進甚だ

至る。

【訳】

王球は字を叔衡といい、太原（山西省太原市）の人である。宋の元嘉九年（四三二）に、涪陵郡（重慶市）の太守となった。賊に襲われて守り切れなかった罪に問われ、江陵（湖北省荊州市）の牢獄に繋がれた。一揃いの大きな鎖をつけられて、しっかりと釘が打たれていた。球は獄中であって、菜食を続け、長いこと『観世音経』をとなえていた。ある夜、いきなり夢の中で自分が高座に座り、上に道人があらわれて一部のお経を渡した。『光明安樂行品並びに諸菩薩名』と題にあった。王球はそれをお経を手にして開いて読んでみた。第一菩薩の名前は忘れてしまった。第二は観世音菩薩であり、第三は大勢至菩薩であったことを覚えている。それぞれに国土と名号があった。そこで眠りから覚めたところ、二本の鎖がすでにとれていることを見た。王球は感応があったことを知り、もう怖くなくなった。そのために、自分で釘を打って鎖を固定し、普段のようにつけた。三日後、意外にも釈放された。王球は元嘉十九年（四四二）に衛府行参軍となつて、広陵（江蘇省揚州市）を治めるのにしたがった。非常に精進した。

【語注】

- \* 王球Ⅱ人名。詳細不詳。字の叔衡については、金剛寺本は同じく「叔衡」とするが、『法苑珠林』と『太平広記』は「叔達」に作り、『法華伝記』は本名「王珠」字「叔衍」に作る。牧田書は、『宋書』巻五十八、『南史』巻二十三王恵伝にみえる王球とは別人であろうとする。
- \* 持齋Ⅱ菜食を続ける。『梁書』巻五十劉杳伝「天監十七年、自居母憂、便長斷腥羶、持齋蔬食（天監十七年（五一八）、母憂に居りて自り、便ち長く腥羶を断ち、齋を持して蔬食す）」。
- \* 『光明安樂行品並諸菩薩名』Ⅱ經典の名と解釈したが、詳細不詳。ちなみに、『観世音菩薩授記経』には、観自在菩薩、大勢至菩薩等がでてくる。
- \* 大勢至Ⅱ勢至菩薩。Maha-sūhama-prāpta の漢訳。
- \* 衛府行参軍Ⅱ「〔7〕」の語注「衛軍行佐」を参照。
- \* 鎮廣陵Ⅱ本文中に元嘉十九年とあることから、王球は、劉義慶の広陵統治に加わったものと考えられる。劉義慶の広陵統治については、「〔7〕」を参照。

【補説】

この話は、「7」の伏万寿の話と、劉義慶が広陵を治めていたことが書かれること及び、両者が衛軍に関わる役職についていたことが共通する。どちらも現在は『宣驗記』の佚文とはなっていないが、本来は、劉義慶（の周囲の人物）が取材して『宣驗記』に採録した話であつたのかもしれない。

〔24〕

【本文】

太原郭宣、蜀郡文處茂俱以義熙十一年隨楊孜敬在梁州。孜敬<sup>③</sup>以輒殺人十一、以此得罪。事逮宣、處茂、並繫荊州獄。宣乃心口念言「常聞觀世音救人苦。我今歸命」。作此密念、便晝夜專誠得十日。得十日後、忽夜三更中、夢見觀世音、甚相慰喻道「汝憂無所」。眠覺、便見兩脚鎖械自脫床上。恐至曉人見、乃潛還著之。處茂問宣「何以得爾」。宣具以事告。處茂曰「卿既能作感、即兼得見濟」。宣曰「卿但如我至念、自應降神。若得解脫、當各出十萬錢、與上明西寺、作福事也」。言此後、於興厲心、經得少何、事遂並散。一説、宣於眠未眠之間、見一

道人好形、長八尺許、當空立、向宣微笑、不見菩薩也。<sup>⑦</sup>人世已遠、遺書兩傳。

【參考資料】

- \* 『弁正論』卷七注所引『宣驗記』
- \* 『法苑珠林』卷十七所引『冥祥記』
- \* 『太平広記』卷一百一十「郭宣」出『弁正論』
- ◇ 『宣驗記』第二三条
- ◇ 『冥祥記』第五三条

【校注】

- (1) 底本は「大」に作る。史実及び『弁正論』等により改める。
- (2) 底本は「攻」に作る。史実により改める。以下同。
- (3) 底本は「敬」字を欠く。文意により補う。
- (4) この「得十日」は底本では、「誠得十日」と「後」の間に小さい○がうたれ、脇に書き足してある。
- (5) 底本は「何」に作る。文意により改める。
- (6) 底本は「興」に作る。文意により改める。
- (7) 底本は「井」に作る。「菩薩」を一字に略したもの。

## 【書き下し】

太原の郭宣、蜀郡の文処茂は俱に義熙十一年を以て楊孜敬に随ひて梁州に在り。孜敬輒ら人を殺すこと十一なるを以て、此を以て罪を得たり。事宣、処茂に速び、並びに荊州の獄に繋がる。宣乃ち心口に念言す「常に聞く觀世音の人の苦を救ふと。我今歸命せん」と。此を作して密かに念じ、便ち昼夜専ら誠に十日を得たり。十日を得たる後、忽ち夜三更中、夢に觀世音を見る。甚だ相慰め諭して道ふ「汝の憂ひ所無し」と。眠りより覚め、便ち兩脚の鎖械の自ら床上に脱するを見る。曉に至りて人の見るを恐れ、乃ち潜かに還た之を著く。処茂宣に問ふ「何を以て爾を得ん」と。宣具さに事を以て告ぐ。処茂曰く「卿既に能く感を作し、即ち兼ねて済はるるを得ん」と。宣曰く「卿但だ私の如く至念すれば、自ら応に降神あるべし。若し解脱するを得れば、当に各の十萬錢を出だし、上明西寺に与へて、福事を作すべきなり」と。此れを言ひて後、ここに於て厲心を興し、経て少何を得、事遂に並びに散ず。一説に、宣眠りて未だ眠らざるの間に、一道人の好き形なるを見、長さ八尺許り、空に当たりて立ち、宣に向ひて微笑し、菩薩を見ざるなり、と。人の世已に遠く、書に兩伝を遺す。

## 【訳】

太原（山西省）の郭宣、蜀郡（四川省）の文処茂は、義熙十一年（四一五）一緒に楊孜敬に随つて、梁州（四川省から陝西省一帯）にいた。楊孜敬は独断で十一人を殺したことで、罪を得た。そのとがめは、郭宣と文処茂にも及び、二人とも荊州（湖北省）の監獄につながれた。郭宣は、そこで、心の中で念じた「觀世音菩薩が人の苦難を救ってくださることをいつも耳にしています。私は今、觀世音菩薩を心から信じましょう」。このような誓いを立て、こつそりと念じ、昼も夜も誠の心を捧げて十日を過ごした。十日たったのち、突然深夜三更（午後十一時―午前一時）に、夢に觀世音菩薩があらわれた。菩薩は郭宣を慰めて諭して言った「おまえの心配はなくなるだろう」。眠りから覚めると、兩脚にはめられていた鎖と足枷がひとりではずれてベッドの上にあるのを見た。明け方になって人に見られるのを心配して、こつそりとまた鎖と足枷をつけた。文処茂が郭宣に聞いた「どうしてそうなったんだい」。宣は事細かに事情を説明した。文処茂は言った「君はもう感応を起こし、さらには、救われることとなった」。郭宣は「君も私のように一生懸命念じれば、神が下りてくるに違いない。もし、脱出することができたならば、それぞれ十

万銭を出して、上明西寺に寄進して、法事をしたらよい」と言った。これを言ってから、強い信仰心が湧いてきて、しばらくたった頃、おとがめはなくなった。

一説によると、郭宣が眠るか眠らないかのときに、みめかたち麗しい道人を見て、背丈は八尺ほど、空中に立っていて、郭宣に向かって微笑したのであって、郭宣は菩薩を見ていないともいう。事件の頃からすでに時間がたっているため、この書には二説ともをしるしておく。

### 【語注】

★ 郭宣Ⅱ人名。詳細不詳。『法苑珠林』巻十七が引用する『冥祥記』では、「郭宣之」に作る。また、事件の後は零陵郡（広西壮族自治区桂林市）、衡陽郡（湖南省衡陽市）の太守となつて、役職についたまま亡くなったとある。

★ 文處茂Ⅱ『晋書』巻八十一毛宝伝及び巻九十九桓玄伝に「涪陵太守文處茂」との記述があり、涪陵（重慶市）の太守をしていたことがわかるが、他の詳細は不明。最期については、補説参照。

★ 楊孜敬Ⅱ『弁正論』、『太平広記』は「楊孜敬」に作り、『法苑珠林』は「楊思平」に作る。『晋書』巻八十四楊佺期伝

に従弟として「楊孜敬」の名がみえるため、「楊孜敬」が正しいと考えられる。『晋書』巻十安帝紀義熙二年（四〇六）の記事に「秋七月、梁州刺史楊孜敬有罪、伏誅（秋七月、梁州刺史楊孜敬罪有りて、誅に伏す）」とあり、梁州刺史であつた楊孜敬が罪を問われ、誅されたとある。そのため本文の義熙十一年（四一五）の頃にはいないことになる。補説参照。

★ 心口Ⅱ心の中と口。『晋書』巻九十一范弘之伝「于時危懼、恒不自保、仰首聖朝、心口憤歎（時に于て危懼し、恒に自ら保たず、仰ぎて聖朝に首ひ、心口憤歎す）」。

★ 念言Ⅱ口に出していう。仏典で常用される語。

★ 歸命Ⅱ心から仏を信仰すること。

★ 憂無所Ⅱ語順が不審。「無所憂」であつたのを書き間違えたか。

★ 上明西寺Ⅱ上明寺のこと。『法苑珠林』巻三十九には、「周昉『地圖』云、（中略）有東西二寺。昔符堅伐晉、荊州北岸並沒屬秦。時桓仲爲荊牧、邀翼法師。度江造東寺、安長沙寺僧。西寺安四層寺僧。符堅歿後、北岸諸地還屬晉家。長沙四層諸僧各還本寺。西東二寺因舊廣立。自晉宋齊梁陳氏、僧徒常數百人（周昉『地圖』に云ふ、〔中略〕東

西二寺有り。昔符堅晋を伐ち、荊州の北岸並びに秦に属さず。時に桓仲〔筆者注Ⅱ桓沖の誤り〕荊の牧と為りて、

翼法師を邀ふ。江を度りて東寺を造り、長沙寺の僧を安ず。西寺には四層寺の僧を安ず。符堅歿して後、北岸諸地還た晋家に属す。長沙の四層諸僧各の本寺に還る。西東の二寺旧に因りて広く立つ。晋宋齊梁陳氏自り、僧徒常に数百人」との記述があり、曇翼が招かれた寺が東西にわかれていたことがわかる。桓沖は、太元二年（三七七）冬十月に荊州刺史に任命されている（『晋書』卷九孝武帝紀）。

★ 福事Ⅱ法事。『高僧伝』卷十三釈慧元伝「常習禪誦經、勸化福事、以爲恒業（常に禪を習ひ經を誦し、勸化福事し、以て恒業と爲す）」。

★ 於Ⅱ「於是」に同じ。このような「於」はすでに〔20〕にみえた。

★ 厲心Ⅱ誠心誠意の心。『論衡』実知篇「夫可知之事、推精思之、雖大無難。不可知之事、厲心學問、雖小無易。故智能之士、不學不成、不問不知（夫れ知るべきの事、推精して之を思へば、大と雖も難きこと無し。知るべからざるの事、厲心して學問すれば、小と雖も易ふる無し。故

に智能の士も、学ばざれば成らず、問はざれば知らず）」。  
★ 少何Ⅱわずかな時間。

#### 【補説】

この話のテキストは二系統ある。『弁正論』が引用する『宣驗記』のもの（『太平広記』も同様）と、『法苑珠林』が引用する『冥祥記』のもののである。

『冥祥記』では、郭宣之のみにつての話となっており、文処茂は登場しない。『宣驗記』は、兩人とも登場し、釈放されたのち、郭宣は、寄進をしたが、文処茂は、結局寄進をしなかったために、盧循が挙兵したときに、流れ矢に当たり、死に際に文処茂は「我に大罪有り」と言ったとある。

また、『冥祥記』では、楊孜敬のかわりに楊思平の名前が登場する。この楊思平は楊佐期の弟にあたる人物であり、『晋書』安帝紀の記事で義熙四年（四〇八）冬十一月癸丑に棄市されたとある。どちらにしても、義熙十一年には存命していない。

兩人が登場している点からして、『繫觀世音応驗記』は、『宣驗記』の方に近いが、『宣驗記』にあった結末を記さない点、『宣驗記』そのままの引き写しではない。さらに、本文の「一

【説】以下は、他の書物にはみられない部分であり、陸果本人によるメモと考えられる。陸果本人が収集できた情報でも、郭宣のところにあらわれたのが菩薩と道人との二説があつた。書きぶりからすると、別々のルートで同じ話を聞いたが、詳細に違いがあつたということだろう。そして、陸果は情報の吟味において、かなり古いことであるから、とのことわりをつけて、異説として残してくれたために、今このように情報参照できる。

事件の人名や年号が混乱しているのも、このように、さまざまな経路で話が伝わっていく過程で生じたものであろう。

## 〔25〕

### 【本文】

超達道人、趙郡人也。魏虜禁畜圖讖、忽復謗有之、乃收付<sup>(3)</sup>滎陽獄。虜博陵公親檢問之。超達答曰「實無」。公大怒、以車輪<sup>(4)</sup>繫頸、嚴防守之。超達雖自知必死、猶專念觀世音。至夜四更、不知車輪所在。守防人悉大眠睡、因是走去。天曉、虜騎四出追之。超達<sup>(5)</sup>知行不免、因伏住草中、騎來<sup>(6)</sup>蹋草、並歷邊不見。怖看虜面、悉見以牛皮障其眼。一日住草中、至夜虜去、得脱。

### 【参考資料】

★『法苑珠林』卷五十一。出『梁高僧伝』としているが、『梁高僧伝』にはなく、『続高僧伝』の誤りか

★『続高僧伝』卷二十五超達伝

### 【校注】

- (1) 底本は「傍」に作る。『続高僧伝』により改める。
- (2) 底本は「牧」に作る。『続高僧伝』により改める。
- (3) 底本は「焚」に作る。実在の地名により改める。
- (4) 底本は「輪」に作る。『続高僧伝』により改める。
- (5) 底本は「遠」に作る。『続高僧伝』により改める。
- (6) 底本は「噓」に作る。『法苑珠林』等により改める。

### 【書き下し】

超達道人は、趙郡の人なり。魏虜凶讖を畜ふるを禁じ、忽ち復た之有るを謗され、乃ち滎陽の獄に収め付せらる。虜の博陵公親しく之に檢問す。超達答へて曰く「実に無し」と。公大いに怒り、車輪を以て頸に繋ぎ、厳しく之を防守す。超達自ら必ず死せんと知ると雖も、猶ほ専ら觀世音を念ず。夜

四更に至り、車輪の在る所を知らず。守防の人悉く大いに眠  
睡し、是に因りて走り去る。天曉になりて、虜騎して四よもに  
出でて之を追ふ。超達行けども免れざるを知り、因りて伏し  
て草中に住す。騎来たりて草を踏み、並びに辺りを歴するも  
見えず。怖れて虜の面を看れば、悉く牛皮を以て其の眼を障ふさぎ  
ぐを見る。一日草中に住まり、夜に至りて虜去り、脱するを  
得たり。

### 【訳】

超達道人は、趙郡（河北省趙県）の人であった。北魏の統  
治者が図讖の所有を禁じた時、すぐさま超達が図讖を持つて  
いると誹謗するものがあり、そこで滎陽（河南省滎陽市）の  
牢獄に収監された。北魏の博陵公が自ら超達道人を尋問した。  
超達は「まったく持つておりません」と答えた。博陵公は非  
常に怒り、車輪を超達の首につないで、厳重に監禁した。超  
達は必ず死ぬことになると思ったが、それでもなおただひた  
すら觀世音菩薩に祈っていた。夜四更（午前二時頃）の時間  
になった頃、車輪がなくなった。また看守もみな熟睡し、そ  
のために、監獄から逃げ去った。夜明けになって、北魏も四  
方に騎馬を出して超達道人の行方を追った。超達は逃げても

逃げ切れないことを悟り、そのために草むらの中に臥せつて  
とどまっていた。騎馬が来て、草をふみ、さらに周囲をみま  
わったが、ついに見つからなかった。おそろおそろ北魏の人  
の顔を見てしまうと、みな牛の皮で北魏の人の眼が覆われて  
いた。一日中草むらの中にとどまり、夜になって北魏の兵士  
がいなくなったため、脱出することができた。

### 【語注】

★ 超達道人Ⅱ『続高僧伝』巻二十五の伝は、冒頭に「釋超  
達、未詳其氏。元魏中行業僧也。多學問、有知解（釈超  
達、未だ其の氏を詳かにせず。元魏中の行業僧なり。学  
問を多とし、知解有り）」とあるあとは、本話と同じ内容  
のみを載せる。北魏拓跋氏が元氏と改姓したことから、  
北魏を元魏と呼ぶことがある。

★ 虜Ⅱ北魏を指す。

★ 圖讖Ⅱうらないの道具。禁絶令については、補説参照。

★ 博陵公Ⅱ博陵は地名。河北省饒陽県に位置する。公は、  
長官の意。太守に同じ。牧田書は誰であるか未詳とする。  
『魏書』に博陵公として確認できる人物に、荀頴及び尉  
元がいるが、補説に載せた事件発生年の推定が正しけれ

ば、事件以前に任にっていた人物である。

★ 守防人Ⅱ看守。〔20〕に既出の語。

【補説】

『魏書』卷七上孝文帝本紀に「九年春正月戊寅、詔曰『圖讖之興、起於三季。既非經國之典、徒爲妖邪所憑。自今圖讖、祕緯及名爲『孔子閉房記』者、一皆焚之。留者以大辟論。又諸巫覡假稱神鬼、妄說吉凶、及委巷諸卜非墳典所載者、嚴加禁斷』」（太和）九年（四八五）春正月戊寅、詔して曰く『圖讖の興、三季に起く。既に経國の典に非ずして、徒らに妖邪の憑く所と爲る。今自り圖讖、祕緯及び名づけて『孔子閉房記』と爲す者は、一に皆之を焚す。留むる者は大辟を以て論ず。又た諸巫覡の神鬼を仮稱し、妄りに吉凶を説き、及び巷諸卜の墳典の載する所に非ざる者に委ぬるは、厳しく禁斷を加ふ』」とある。これは、陸杲の生存中の事のため、このときの出来事が伝わった可能性がある。

26

【本文】

魏虜主嘗疑沙門作賊、有數百人道人悉被收。取一寺主、以繩急纏頸至脚。剋取明日先斬之。寺主怖急、一心念觀世音。夜半即覺繩寬。<sup>①</sup>及曉、索然都斷。既得解脫、即便走。明日監司來、不見之。是知神力所助。即白虜主、明諸僧不反、遂得一時放散。

【参考資料】

★『法苑珠林』卷五十一

★『続高僧伝』卷二十五釈超達伝附釈僧明道人

【校注】

(1) 底本は「寛」字に作る。『続高僧伝』により改める。

(2) 底本は「及」字のようにも読める

【書き下し】

魏の虜主嘗て沙門の賊を作すを疑ひ、數百人の道人悉く収めらるる有り。一寺主を取りて、繩を以て急く頸より脚に至

るまで纏<sup>まと</sup>はる。明日を剋<sup>き</sup>取し先に之を斬らんとす。寺主怖れ急ぎ、一心に觀世音を念ず。夜半即ち覺むれば繩<sup>なは</sup>寛し。曉に及び、索然として都て斷つ。既に解脫するを得て、即便ち走る。明日監司來たりて、之を見ず、是れ神力の助くる所なるを知る。即ち虜主に白し、諸僧の反せざるを明らかにし、遂に一時の放散を得たり。

### 【訳】

魏の虜主は過去に、僧侶が盜賊をしているのではないかと疑い、數百人の僧侶が全員収監されるということがあつた。ある寺の貫首が捕まり、縄で首から脚までグルグル巻きにされた。翌日まず貫首を斬ることが決められた。貫首はこわくなり、あわてて、心の中で觀世音を念じた。夜中に目が覺めると縄がゆるくなっている。夜明けになると、バラバラとすべて切れ落ちた。脱出できたため、そこですぐさま逃げ出した。翌日看守がやってきて、姿を見なかった。これは神が助けたものであることを知った。そこで虜主に報告し、僧侶達が反乱をしていないことを証明し、一挙に釈放されることとなった。

### 【語注】

★ 魏虜主Ⅱ北魏孝文帝（在位四七一—四九九）を指す。

★ 急Ⅱきつい。『齊民要術』卷三雜說第三十「凡開卷讀書、

卷頭首紙、不宜急卷。急則破折、折則裂（凡そ卷を開きて書を読むに、卷頭首紙は、宜しく急に巻くべからず。急

なれば則ち破れて折れ、折るれば則ち裂ける）」。

★ 索然Ⅱバラバラとわかれ離れるさま。『晋書』卷三十四羊

祜伝「至劉禪降服、諸營堡者索然俱散（劉禪の降服するに至り、諸の堡を営む者索然として俱に散ず）」。

★ 放散Ⅱ物を放出するの意でよく用いられる語。人などに

ついての用例としては、『三国志』卷八公孫瓚伝裴松之注所引『魏氏春秋』「瓚部曲放散在外（公孫）瓚の部曲放散すること外に在り）」がある。

### 【補説】

この話では、主人公の僧侶の名前がしるされていない。ただ、同じ話を載せる『法苑珠林』及び『続高僧伝』では、僧明道人という名があり、北台石窟寺主であると書かれる。北台石窟寺は、北石窟寺と同じものであるならば、北魏永平二年（五〇九）の建立になる寺であるが、そうすると、本書の成立よりもあとの話になってしまう。

〔25〕〔26〕は、『続高僧伝』、『法苑珠林』でも連続して引用されており、この『繫観世音応驗記』をそのまま利用した可能性が高いだろう。『続高僧伝』は、『応驗記』から内容を収録する際に、僧侶をすべて魏の人とする傾向があり、『続光世音光世音応驗記』第五話道泰道人でも同様になっている。衣川賢二「張演『續光世音応驗記』訳注（上）」（『花園大学文学部研究紀要』三二、一九九九）、一五頁参照。

## 〔27〕

### 【本文】

王葵<sup>〔1〕</sup>、陽平人也。魏虜當欲殺是、鎖械<sup>〔2〕</sup>内土硎裏<sup>〔3〕</sup>。硎深廿餘丈、或有飲食、皆懸與之。葵本事佛、先誥『觀世音經』。於是至念誦、得滿千遍。夜忽然覺身自出硎外、而無故鎖械。因是走遁、即便得免。此是道聰聰<sup>〔4〕</sup>所説。

### 【参考資料】

★ 金剛寺本『佚名諸菩薩觀音抄』（17）

### 【校注】

- （1）底本は判読困難な字に作る。本文中であとに「葵」とでてくるため、「葵」とする。
- （2）「是」字、判読しがたい。牧田書は「先」、孫書は「足」、董書は「之」ととる。
- （3）底本は「云」に作る。金剛寺本により改める。
- （4）「聰」の一字は衍字の可能性が高いが、根拠資料がないためそのままにしておく。牧田書、孫書は「聰聰」ととる。

### 【書き下し】

王葵は、陽平の人なり。魏虜是を殺さんと欲するに当たりて、鎖械して土硎の裏に<sup>い</sup>内る。硎の深きこと廿餘丈、或とき飲食有れば、皆懸けて之に与ふ。葵本より仏に事へ、先に『觀世音經』を誦んず。是に於て至念に誦じ、千遍に満つるを得たり。夜忽然として身の自ら硎外に出で、故の鎖械無きを覺ゆ。是に因りて走り遁れ、<sup>すなは</sup>即便ち免るるを得たり。此れは是れ道聰聰の説く所なり。

【訳】

王葵は、陽平郡（山東省）の人であつた。魏が王葵を殺そうとして、鎖と枷をはめて地下牢の中に入れた。地下牢の深さは二十丈あまり、飲食物があると、紐につるされて与えられた。王葵はもともと仏に仕えており、前から『観世音経』をそらんじていた。そこで、心の底から経を唱え、千回となつた。夜たちまち自分の身が地下牢の外にでて、鎖や枷がないことに気がついた。そこで、逃走して、逃れることができた。この話は、道聰聡が話したものである。

【語注】

- \* 王葵Ⅱ人名。詳細不詳。金剛寺本の翻刻は「王蔡」に作る。
- \* 陽平Ⅱ魏に殺されそうになつた人物ということで、北魏にあつた山東省の地名としたが、もし南斉の人物であつた場合には、江蘇徐州の陽平郡であつた可能性もある。牧田書は、江蘇徐州附近とする。
- \* 内Ⅱ「納」に通じる。入れる。
- \* 土礪Ⅱ地下牢。
- \* 道聰聡Ⅱ僧侶の名と思われるが不詳。

〔28〕

【本文】

高度勃海人也。志立塔寺、而頃恒傭力、勞之。後爲趙郡人債、送官絹至索虜朝。<sup>(5)</sup>都不解罪福、遂欲偷絹擬寺、因取三百匹、即爲檢校所得、於是見閉、置大函中、唯出其頸、夜輒取髮懸之。如是三夕。度絶喚觀世音、未嘗暫住。後夜向曉、忽不復見函、而身散在地。視所在、處乃去昨處五里、因而自去、安徐得逸。

【参考資料】

\* なし

【校注】

- (1) 底本は「領」に作る。文意により改める。
- (2) 底本は「垣」に作る。文意により改める。
- (3) 底本は「儲」に作るが、異体字でもそのような字がないため、「傭」に改める。
- (4) 底本は「超」に作る。文意により改める。
- (5) 底本は「虜索乾」に作る。文意により改める。

(6) 底本は「幽」に作る。文意により改める。「函」を「幽」と書くのは「14」にもみられる。以下同。

(7) 底本は「後」に作る。文意により改める。

### 【書き下し】

高度は渤海の人なり。塔寺を立てんと志すも、頃恒に力に備はれ、之に勞す。後に趙郡の人の債と為り、官絹を送りて索虜朝に至る。都て罪福を解せず、遂に絹を偷みて寺を擬せんと欲し、因りて三百匹を取る。即ち検校の得る所と為り、是に於いて閉ぢらる。大函の中に置かれ、唯だ其の頸のみを出だし、夜は輒ち髪を取りて之に懸く。是の如くすること三夕、度絶だ觀世音を喚ぶこと、未だ嘗て暫く住まず。後夜暁に向かひ、忽ち復た函を見ず、身散たれて地に在り。所在を視るに、処乃ち昨処より去ること五里、因りて自ら去り、安んじて徐ろに逸るを得たり。

### 【訳】

高度は渤海郡（山東省高苑県）の人である。塔のある寺を建ててをを目指していたが、この頃は常に夫役に雇われ、疲

勞していた。後に趙郡（河北省）の人に頼まれて役所の絹を送って北魏王朝へ到着した。全く悪行と善行とを理解しないで、はては絹を盗んで寺を建てようと思い、絹を三百匹取った。すぐに検校に捕まり調べられて、ここで監獄に入れられた。高度は、大きな櫃の中に据え付けられ、ただ彼の頭のみが出され、夜になる度に髪を取ってつり下げられた。このような状態で三日三晩にわたって彼は觀世音を呼び、少しの間も觀世音を呼ぶのが止むことはなかった。夜が明けるときにかけて、突然全く櫃が見えなくなり、高度の身体は外へ放たれて地面にあつた。自分の居る場所を見ると、その場所は昨日いた場所から五里離れていた。そこで自分で離れ、安心してゆっくり逃れることができた。

### 【語注】

★ 頃Ⅱこのごろ、近ごろ。曹丕「与吳質書」（『文選』卷四十二）「頃何以自娛。頗復有所述造不（頃何を以てか自ら娛しむ。頗る復た述造する所有りや不や）」。

★ 傭力Ⅱ勞役につく、夫役に雇われる。『宋書』卷九十一孝義列伝・郭世道伝「家貧無産業、傭力以養繼母（家貧しくて産業無く、力に傭はれて以て繼母を養ふ）」。

★ 債Ⅱ「債」は「責」に通じる。

★ 索虜Ⅱ南北朝時代に、南朝が北魏を軽んじて呼んだ語。また、索頭虜ともいう。髪を縄で結んでいたことからそう呼ばれた。漢の降将・李陵の子孫という。『宋書』巻九十五に列伝あり。牧田書は乞伏乾帰のことではないかとするが、乞伏氏のことを索虜と呼ぶことはないため、不適切であろう。

★ 官絹Ⅱ役所の絹。『晋書』卷七十三庾冰伝「冰天性清慎、常以儉約自居。中子襲嘗貸官絹十匹、冰怒、捶之、市絹還官（庾）冰の天性清慎にして、常に儉約を以て自ら居る。中子の襲嘗て官絹十匹を貸り、冰怒りて、之を捶ち、絹を市ひて官に還す」。

★ 罪福Ⅱ罪惡（悪行）と福德（善行）。

★ 擬Ⅱ文意から、「くしようにとする、くするつもりである」の意で解するのが最も自然であると考え、ここではそのように訳した。しかし、本文では「擬」を動詞としてとっているため、再考が必要かもしれない。

★ 檢校Ⅱ官名。物事を調べただすことを任とする。東晋、北朝では「檢校御使」といった。『魏書』職官志では第九品に置かれる。

★ 頸Ⅱ首。のどのあたりを指す。おそらく頭部のみが函から出ている状態であると考えられるためここで「頸」と表記されるのは不審。

★ 安徐Ⅱゆったりとしたさま。『法苑珠林』巻九「時太子見彼雁帶箭被傷墮地、見已兩手安徐捧取已、跣趺安雁膝上（時に太子彼の雁箭を帯びて傷を被りて地に墮つるを見、見て已に兩手もて安んじて徐ろに捧取し已み、跣趺して雁を膝上に安んずる）」。

### 【補説】

またしても北方における話である。それまでは魏虜と見られていたものが、索虜と表記変更されている。他に類話が見られないことから、陸杲が直接北方から来た人に聞いた話と考えられる。

（中国文学専攻 修士二年 岩田麻愛）

## 【本文】

于寘王女婿、名天忍、爲從弟所鎖繫、送往何覺國、殺之。天忍先自造金像長二丈六尺、恒供養衆僧、讀誦『觀世音經』。既遭厄難、心益存至。一夜、鎖縛忽自然解脫、徑得叛去。

## 【參考資料】

＊ なし

## 【校注】

(1) 「二丈六尺」、底本は「二丈尺」に作る。語注参照。

## 【書き下し】

于寘<sup>うてん</sup>王女の婿、名は天忍、從弟の鎖繫する所と爲り、送られて何覺國に往き、之に殺されんとす。天忍先に自ら金像の長二丈六尺なるを造り、恒に衆僧を供養し、『觀世音經』を讀誦す。既に厄難に遭ふも、心は益す存<sup>おも</sup>ひて至る。一夜、鎖縛忽ち自然と解脫し、徑<sup>ただ</sup>ちに叛去するを得たり。

## 【訳】

于寘國の王女の婿に、天忍という名のものがいて、從弟に鎖で繫がれ、何覺國に送られて行き、從弟に殺されそうになった。天忍は以前から進んで高さ二丈六尺の金像を造ったり、普段から多くの僧侶に布施をしたり、『觀世音經』を声に出して読んでりしていた。わざわざに遭った後も、彼の觀世音への気持ちはますます極まった。すると一晩にして、鎖の束縛が、突然自然とほどけてしまった。天忍は、すぐに逃げ去ることができた。

## 【語注】

＊ 于寘＝于闐のこと。ホータン。漢の西域の国名。蔥嶺<sup>そうりやう</sup>の北。現在の新疆省に位置する。『漢書』卷九十六西域伝に「其河有兩原、一出蔥嶺山、一出于闐（其の河兩原有り。一は蔥嶺山より出で、一は于闐より出づ）」とあり、同箇所顔師古注に「闐字與寘同（闐の字寘と同じ）」とある。『梁書』卷五十四諸夷伝、『魏書』卷一百二西域伝にも「于闐國」とある。また『魏書』西域伝には、「俗重佛法、寺塔僧尼甚衆、王尤信尚。每設齋日、必親自灑掃饋食焉（俗仏法を重んじ、寺塔僧尼甚だ衆く、王尤も信じ尚ぶ。

齋日を設ける毎に、必ず親しく自ら灑掃して饋食す」とあり、于闐国は仏教が盛んであったことがわかる。

★ 天忍Ⅱ人名。詳細不詳。

★ 何覺國Ⅱ国名。詳細不詳。

★ 二丈六尺Ⅱ仏像は丈六（一丈六尺）で作られることが多いが（（22）語注参照）、ときに、二丈六尺で作られたという記述もある（『法苑珠林』巻一百周孝明帝など）。これも、仏像の丈であるため、文字と尺字の間に「六」が本来あった可能性があるのではないだろうか。金像であるため、二尺という小さいものであった可能性も考えられるが、大きな金像も存在する。

★ 厄難Ⅱ災難。『晋書』巻九十二王沈伝「當厄難則騁權譎以良圖（厄難に当たれば則ち權を騁して譎りて良きを以て図る）」。

★ 存至Ⅱ「存」は心から思うこと。「至」は最も極まった状態のこと。ここでは「思念」に近い言葉として使われていると思われる。他所でよくもちいられる「存念」と同意か。

★ 叛去Ⅱ「叛」は逃げ隠れるの意。『幽明録』（『藝文類聚』巻九十五所引）「阿周盜二十万錢叛。後試開庫、實如所言也。

奴亦叛去（阿周二十万錢を盗みて叛す。後に試みに庫を開ければ、実に言ふ所の如きなり。奴も亦た叛去す）。

（中国文学専攻 修士一年 林美江）

#### 【補説】

前話に引き続き、陸杲が北方から来た人物から採集した話であろうと推定される。しかし、他の話が山東省あたりを舞台にしたものであるのに対し、本話のみ、西域の国の、しかも支配者階層の人物に関わる話であること、孤立している。

（佐野誠子）

#### 〔30〕

#### 【本文】

關中有一人、本信佛法。非意遭事。郡吏懸録送、枷械甚堅。<sup>(1)</sup> 吏至客舍住食、罪人置在車上。此人乃苦存念觀世音、念念相續、不覺枷械一時自脫、下車便走去。監司覓不能得、載械具告所在。

#### 【参考資料】

★ なし。

【校注】

(1) 底本は「史」に作る。文意により改める。

【書き下し】

関中に一人有り、本より仏法を信ず。意に非ざりて事に遭ふ。郡吏懸かに録送し、枷械甚だ堅し。吏客舎に至りて住まりて食らふも、罪人置かれて車上に在り。此の人乃ち苦だ観世音を存念す。念念して相續くれば、覚えずして枷械一時に自ら脱し、車を下りて便ち走り去る。監司覓むれども得る能はずして、械を載せて具さに所在に告ぐ。

【訳】

関中(陝西省、西安一帯を指す)に元来より仏の教えを信じる人がいた。思いがけず捕まった。郡の役人はその人を捕まえるか遠くに護送し、その人にかかった枷かせはとても堅かった。役人は宿屋に着き投宿して食事をしたが、罪人は車の中に置かれたままだった。この人はそこでしきりに観世音を念じ続けた。一念も休まずに念じ続けたところ、思いがけず枷が一気に自然と外れたので、車を下りてすぐに逃げ去った。

役人は探しても見つけることができず、枷を載せて運び、事細かに当地の地方官に報告した。

【語注】

- ★ 事Ⅱ事件。『新書』過秦下「天下多事、吏不能紀。百姓困窮而主不收卹(天下多事にして、吏紀む能はず。百姓は困窮するも主は収卹せず)」。
- ★ 懸Ⅱ遠い。庾信「擬詠懷詩」「遙看塞北雲、懸想關山雪(遙かに看る塞北の雲、懸かに想ふ関山の雪)」。
- ★ 録送Ⅱ護送する。『北齊書』卷二十薛脩義傳「爾朱榮以脩義豪猾反覆、録送晉陽(爾朱榮脩義の豪猾にして反覆するを以て、晋陽に録送す)」。
- ★ 枷械Ⅱ枷は首かせ。械は手かせ足かせ。
- ★ 客舎Ⅱ旅行客用の宿舎。『管子』輕重乙「請以令、爲諸侯之商賈立客舎。一乗者有食、三乗者有芻菽、五乗者有伍養、天下之商賈歸齊若流水(請ふ令を以て、諸侯の商賈の為に客舎を立てよ。一乗者は食有り、三乗者は芻菽有り、五乗者は伍養有れば、天下の商賈齊に帰ること流るる水の若し)」。
- ★ 住食Ⅱ留まつて食事をする。『靈鬼志』(『法苑珠林』卷六

十一所引)「於先既行數十里。樹下住食(胡僧)先に於て既に行くこと数十里。樹下にて住食す」。

★ 念念相續<sup>1</sup> 仏教語。常に念仏の業を行つて、一念も休まないこと。

★ 監司 監督の責務を負う役人。漢代以後の司隸校尉と督察州郡の刺史、転動使、按察使、布政使等の通称を監司と言つた。

★ 所在 所在官員のこと。地方の官吏。『後漢書』卷六十六陳蕃伝「今二郡之民、亦陛下赤子也。致令赤子爲害、豈非所在貪虐、使其然乎(今二郡の民、亦た陛下の赤子なり。赤子をして害を爲さしむるを致すは、豈に所在の貪虐する所に非ざれば、其れを然らしむるか)」。

(中国文学専攻 学部三年 加藤薫)

## [31]

### 【本文】

僧苞道人説<sup>(1)</sup>。昔嘗出行<sup>(2)</sup>、見官司送六劫囚。囚見道人、告曰「我必無活理、道人事何神。能見救不」。有一阿練、莫知所從。語之曰「有觀世音菩薩<sup>(3)</sup>、能救衆生。汝至心念之、便可脱」。囚

大歡喜、於是同共存念。行從一市郭、遇部送吏共飲酒。因爾醉臥、悉脱衣仗。諸囚夜忽覺枷鎖自寛、試動即脱。因取人襖、官仗、著之而去。

### 【參考資料】

★ 『高僧伝』卷七僧苞伝

### 【校注】

(1) 底本は「色」に作る。『高僧伝』により改める。

(2) 底本は「人」字を欠く。『高僧伝』により補う。

(3) 底本は「井」に作る。「菩薩」を一字に略したもの。

(4) 底本の字、判別し難し。牧田書は「遇」、孫書、董書は「過」とする。

(5) 底本は「送」字と「共」字の間に、「史」字を挿入する。

『高僧伝』により「吏」に改める。

(6) 底本は「誠」に作る。文意により改める。

### 【書き下し】

僧苞道人説く。昔嘗て出行し、官司の六劫囚を送るを見る。囚道人を見て、告げて曰く「我必ず活くる理無し。道人何の

神にか事へん。能く救はるるや不<sup>いな</sup>や」と。一阿練有るも、従ふ所を知る莫し。之に語りて曰く「觀世音菩薩有り、能く衆生を救ふ。汝至心に之を念ずれば、便ち脱すべし」と。囚大いに歡喜し、是に於て同共<sup>とも</sup>に存念す。一市郭に行従すれば、遇<sup>たま</sup>ま部送の吏共に酒を飲む。爾るに因りて酔臥し、悉く衣仗を脱す。諸囚夜に忽ち枷鎖の自から寛なるを覚え、試みに動かせば即ち脱す。因りて人の襖、官仗を取り、之を著けて去る。

### 【訳】

僧苞道人がつぎのような話をした。昔かつて旅に出たときに、役人が六人の強盜の囚人を護送しているのを見かけた。囚人たちが道人を見て、訴えて言った「私たちはもう生き延びられません。お坊様はどんな神様にお仕えしていらつしやるのでしょうか。救われることができるでしょうか」と。一人の仏道者が居たが、どんな神に従っているかということを知らなかった。そこで囚人たちに語つて言うことには、「觀世音菩薩というものがあって、命あるものをお救いになることができる。あなたがたは大いに心に觀世音菩薩を念じれば、抜け出すことができるでしょう」と。囚人たちは大いに喜び、そこで全員で同じようにずっと心に念じていた。そして、ある市

場へついて行き、たまたま護送の役人がみな酒を飲んだ。そのために酩酊して寝てしまい、衣服や武器を全て脱ぎ捨ててしまった。夜、囚人たちは突然枷や鎖が自然に緩まったのを感じ、試しに動かしてみるとはずれてしまった。そこで役人の上着や武器を取り、これらを身に着けて立ち去ってしまった。

### 【語注】

★ 僧苞道人＝僧侶の名。『高僧伝』巻七に伝あり。京兆（長安）の人で、鳩摩羅什に師事し、宋の永初年間（四二〇―四二二）に北徐州（江蘇省徐州）を旅して黃山精舎に入つた。宋の元嘉年間（四二四―四五三）に亡くなった。『名僧伝』巻七にも伝が収録されていた。

★ 告＝訴える。『南史』巻七十三孝義列伝上「有晉陵吳興康妻趙氏、父亡弟幼、遇歲饑、母老病篤、趙詣鄉里告乞、言辭哀苦（晉陵吳興康の妻趙氏有り、父亡じ弟幼く、歲饑に遇ひ、母老いて病篤く、趙郷里に詣り乞を告げ、言辭哀苦たり）」。

★ 阿練＝仏道者。僧侶に対する親しみを込めた呼び方。『高僧伝』卷十曇始（長安の僧侶）が白足阿練と呼ばれている。行従＝付き従つて行く。『漢書』卷八十一貨殖列伝・宣曲

任氏伝「呉楚兵之起、長安中列侯封君行從軍旅（呉楚兵

の起つや、長安中の列侯封君軍旅に行從す）」。

★ 市郭Ⅱ市井。『南齊書』卷二十五張敬兒伝「攸之於湯渚村

自經死、居民送首荊州、敬兒使楯擊之、蓋以青繖、徇諸

市郭、乃送京師（沈）收之湯渚村に於て自ら經りて死

し、居民首を荊州に送り、敬兒楯をして之を撃げしめ、

蓋おほふに青繖を以てし、諸市郭を徇り、乃ち京師に送る」。

★ 部Ⅱ役所。

★ 送吏Ⅱ護送を行う官吏。『後漢書』卷四十一第五倫伝「於

是斌將俠客晨夜追種、及之於太原、遮險格殺送吏、因下馬

與種、斌自步從。一日一夜行四百餘里、遂得脫歸（是に

於て斌俠客を將ゐて晨夜種を追ひ、之に太原に及ぶ、遮

險して送吏を格殺し、因りて馬を下りて種に与へ、斌自

ら歩き從ふ。一日一夜行くこと四百餘里、遂に脱歸する

を得たり」。

★ 襖Ⅱ裏地のついた上着。

★ 仗Ⅱ刃のついた兵器の総称。武器。『宋書』卷六孝武帝紀

大明八年「遠近販鬻米粟者、可停道中雜稅。其以仗自防、

悉勿禁（遠近米粟を販鬻する者は、道中に停めて雜稅す

るべし。其の仗を以つて自ら防ぐは、悉く禁ずる勿れ」。

（中国文学専攻 学部三年 五藤嵩也）

## 【補説】

「僧苞道人説く」とあるが、語注にあげたように、僧苞道人は、宋の元嘉年間（四二四―四五三）に亡くなっており、陸杲が直接話を聞くことは不可能である。誰かが聞き書きしたものをそのまま採録したのだろうか。

この事件は『高僧伝』僧苞伝にも取られ、「苞嘗於路行見六劫被録。苞爲說法勸念觀世音。群劫以臨危之際。念念懇切。俄而送吏飲酒洪醉。劫解枷得免焉（苞嘗て路行に於て六劫の録らるるを見る。苞爲に說法し觀世音を念ずるを勸む。群劫臨危の際に以て、念念懇切す。俄にして送吏酒を飲みて洪醉す。劫枷を解きて免るるを得たり）」と簡略にするされる。

「有一阿練、莫知所從」は解釈が難しい。董書は、その場にあった僧侶を複数人とした上で、「莫知所從」を「倉促之間（あわただしくしている間に）」と訳すが、無理があるだろう。阿練は、僧苞ではない僧侶を想定したくなるが、『高僧伝』では、引用したように「苞爲說法」と僧苞本人が説明したこととなっている。

（佐野誠子）

## 【本文】

朱齡石、沛人也。爲宋高祖功臣。<sup>(1)</sup>晉義熙初、作吳興武康令、時縣有凶猾、齡石誅殺過多、朝廷使張崇之檢校其事、遂被收錄、繫在獄中、當死。家訟訴、是非未辯。時有道人釋惠難、與齡石有舊、乃往告、入獄看之。因教其念觀世音、又留一人像與供養。齡石本事佛、并窮厄、意專、遂一心係念。得七日、即鎖械自脫。<sup>(5)</sup>獄吏驚怪、以故白崇。崇疑是愁苦形瘦、故鎖械得脫。試使還著、永不復入。猶謂偶爾、更釘著之。又經少日、已得如前。凡三過、崇即啓、以爲異。爾時、都下前論詳其事、已破申。會崇啓至、即還復縣。齡石亦終能至到、兄弟有功名。

## 【參考資料】

＊ なし

## 【校注】

- (1) 底本は「宗」に作る。史実により改める。  
 (2) 底本は「庚」に作る。史実により改める。  
 (3) 底本は「尺」に作る。「釋」を略して書いたもの。

(4) 底本は「興」に作る。文意により改める。以下同。

(5) 底本は「誠」に作る。文意により改める。

(6) 底本は「徑」に作る。文意により改める。

## 【書き下し】

朱齡石は、沛人なり。宋の高祖の功臣爲り。晋の義熙の初め、吳興武康令と作る。時に県に凶猾なるもの有り、齡石誅殺すること過多なり。朝廷張崇之をして其の事を檢校せしめ、遂に收録し、繫がれて獄中に在り、当に死すべし。家訟訴するも、是非未だ弁ぜず。時に道人釈惠難有り、齡石と旧有りて、乃ち往きて告げ、獄に入りて之を看る。因りて其れをして觀世音を念ぜしめ、又た一人像と供養とを留む。齡石本より仏に事へ、並びに窮厄し、意専らにして、遂に一心に念を係く。七日を得、即ち鎖械自ら脱す。獄吏驚き怪しみ、以て故に崇に白す。崇疑ふらくは是れ愁苦して形瘦し、故に鎖械自ら脱す、と。試みに還た著けしむるも、永へに復た入らず。猶ほ偶爾なりと謂ひて、更めて釘もて之を著く。又た少日を経、已に前の如きを得たり。凡そ三たび過ぎて、崇即ち啓し、以て異と爲す。爾の時、都下に前に其の事を論詳し、已

に破申す。会<sup>たまた</sup>ま崇の啓至り、即ち還りて県に復す。齡石も亦た終に能く至<sup>いた</sup>りし、兄弟功名有り。

### 【訳】

朱齡石は、沛（江蘇省沛県）の人であつた。宋の高祖劉裕の功臣である。晋の義熙年間（四〇五―四一七）のはじめ、呉興郡武康県（浙江省呉興県南部）の長官になつた。当時、県に凶猾な輩があり、朱齡石は、この人たちを誅殺すること過多であつた。朝廷は張崇之にその事について調べさせ、ついに朱齡石は捕えられて獄に繋がれ、死罪になつた。朱齡石の家の者たちは訴え出たが、どうなるかはまだ明らかにならなかつた。当時、僧の釈惠難という者がいた。朱齡石とは旧知の仲にあつた。そこで朱齡石の家の者は釈惠難を訪ねて朱齡石の事を告げ、釈惠難は獄に入つて朱齡石に面会した。それにより釈惠難は朱齡石に『観世音經』を唱えさせ、また、仏像一体と供養具を残した。朱齡石はもともと仏教を信仰しており、そのうえ窮地に立つたため、朱齡石は一意専心し、そして一心に思いを観世音にかけた。七日目になると、とりもなおさず鎖と枷がひとりでに外れた。獄吏は驚き不思議に思つた。そのため、崇之に告げた。崇之は、おそらく朱齡石が憂

え悩み、瘦せ細つたために、鎖と枷がひとりでに外れてしまつたのだらうと考えた。崇之は試しにまた朱齡石に鎖と枷をつけさせ、鎖と枷が二度と抜けないようにさせ、やはり拘束具が外れたのはたまたまただと言つて、さらに釘も使つて齡石を獄に繋いだ。またわずか数日を経て、やがて前回のようにな鎖や枷が勝手に外れた。そのようなことがおよそ三回あつたので、崇之は、この件について上申し、奇怪なことだとして。この時、都の中において、先に朱齡石の罪について詳しく調査し、まもなく朱齡石の身の潔白が証明された。うまい具合に張崇之の報告が届き、すぐに朱齡石は県令の地位を回復した。朱齡石はまた、のちには出世し、朱齡石の兄弟にも功名があつた。

### 【語注】

★ 朱齡石＝劉宋の人。字は伯児。盧循を破つて西陽太守となり、蜀を討つて元帥となり、蜀が平定されると豊城侯に封じられた。その後、雍州刺史となり、関中の諸軍事を取り仕切つたが、城が陥落して死亡した。『宋書』巻四十八、『南史』巻十六に伝あり。

★ 宋高祖＝劉宋の初代皇帝、武帝劉裕を指す。在位四二〇

―四二二。『宋書』卷一、二、三に本紀あり。

★ 凶猾Ⅱ凶暴で狡猾であること。またそのような者。『晋書』卷一百一十四符堅載記下「任臣以劇邑、謹爲明君翦除凶猾（臣に任するに劇邑を以てすれば、謹みて明君の為に凶猾を翦除せん）」。

★ 收録Ⅱとらえる。『南史』卷四十五王敬則伝「使於高麗、與其國女子私通、因不肯還、被收録然後反（高麗に使其の國の女子と私通し、因りて還るを肯ぜず、收録せられて然る後に反る）」。

★ 張崇之Ⅱ『晋書』卷十安帝紀、隆安五年（四〇一）六月の記事に、「右衛將軍張崇之守石頭」との記述がみえるが、同一人物であるかどうかは不詳。張崇という人物名であれば、『晋書』に、符堅の武將として名前が散見される。また、〔49〕には、張崇の応驗譚がある。そちらを見よ。

★ 訟訴Ⅱ訴訟をする。

★ 惠難Ⅱ僧侶の名。詳細不詳。

★ 人像Ⅱ人の像。彫像あるいは塑像。ここでは仏像と解釈する。

★ 供養Ⅱ供養具。供養するための道具。

★ 窮厄Ⅱ困難を窮めること。『法苑珠林』卷五十「一人臥熟

失輦。仍遇天雨雪失去徑路。窮厄山中、啼哭呼天（一人臥熟して輦を失ひ、仍ほ天の雨雪に遇ひて徑路を失去す。山中に窮厄し、啼哭して天を呼ぶ）」。

★ 係念Ⅱ思いを阿弥陀や浄土にかけること。『法苑珠林』卷六十「淨心係念歸依三寶（心を浄め念を係け三宝に帰依す）」。

★ 論詳Ⅱ論は物事の是非について話しあうこと。詳は明らかにすること。『三国志』卷四十三少帝紀裴松之注所引『魏氏春秋』「諸卿具論詳之（諸卿具さに之を論詳す）」。

★ 破申Ⅱ申告（訴えを）破る。『続高僧伝』卷三釈慧贖伝「斯論破申、其猶此矣（斯論を破申すること、其れ猶ほ此くのごときなり）」。

★ 至到Ⅱ程度が極点に達すること。『晋書』卷五十八周延伝「黃門侍郎周延忠烈至到、爲一郡所敬（黃門侍郎周延忠烈なること至到にして、一郡の敬する所と爲る）」。

★ 兄弟有功名Ⅱ『宋書』卷四十八朱齡石伝には、弟の朱超石の伝が附され、高祖劉裕のもとで車騎參軍事、尚書都官郎になり、さらに、中兵參軍、寧朔將軍、沛郡太守になったとある。関中が乱れた時、旨を奉じて河洛を慰勞し、赫連勃勃に殺された。

（中国文学専攻 学部三年 梅木風花）

## 【補説】

『宋書』朱齡石伝は、朱齡石が、武康令となり、專横の県人姚係祖及びその兄弟数十人を殺害したことについて次のような記載をする。「初爲殿中將軍、常追隨桓脩兄弟、爲脩撫軍參軍、在京口。高祖克京城、以爲建武參軍。從至江乘、將戰、齡石言於高祖曰『世受桓氏厚恩、不容以兵刃相向、乞在軍後』。高祖義而許之。事定、以爲鎮軍參軍、遷武康令、加寧遠將軍。喪亂之後、武康人姚係祖招聚亡命、專爲劫盜、所居險阻、郡縣畏憚不能討。齡石至縣、僞與係祖親厚、召爲參軍。係祖恃其兄弟徒黨強盛、謂齡石必不敢圖己、乃出應召。齡石潛結腹心、知其居處塗徑、乃要係祖宴會、叱左右斬之。乃率吏人馳至其家、掩其不備、莫有得舉手者、悉斬係祖兄弟、殺數十人、自是一郡得清（初め殿中將軍と爲り、常に桓脩兄弟に追隨し、脩の撫軍參軍と爲り、京口に在り。高祖京城を克し、以て建武參軍と爲す。從ひて江乘に至り、將に戦はんとして、齡石高祖に言ひて曰く『世桓氏の厚恩を受け、兵刃を以て相ひ向かふを容れず、乞ふ軍後に在るを』と。高祖義して之を許す。事定まりて、以て鎮軍參軍と爲し、武康令に遷し、寧遠將軍を加ふ。喪亂の後、武康の人姚係祖亡命を招聚し、専ら劫盜を爲し、居る所險阻にして、郡県畏憚して討つ能はず。齡石

県に至り、僞りて係祖と親厚し、召して參軍と爲す。係祖其の兄弟徒党の強盛なるを恃みて、謂へらく齡石必ず敢て己を図らずと、乃ち出でて召に応ず。齡石潜かに腹心と結び、其の居處塗徑を知りて、乃ち係祖に宴會を要め、左右を叱して之を斬る。乃ち吏人を率ゐて馳せて其の家に至り、其の不備なるを掩ひ、得て手を拏ぐる者有ること莫く、悉く係祖の兄弟を斬り、数十人を殺す。是れ自り一郡清きを得たり」。

この話にあるような張崇之の取り調べについては載せず、また仏教を信仰していたことも、正史の伝では確認できない。

（佐野誠子）

## 〔33〕

### 【本文】

山陽有一人、名僧儒、父子皆事佛精進。儒忽非意被繫、唯存念觀世音。得數十日、然鎖便寸寸自折。<sup>(1)</sup>不敢輒去、以語主帥。<sup>(4)</sup>即復鎖、堅牢倍前。又經少日、已復自斷。爾時篤民鎮山陽、聞此即放之。

### 【参考資料】

★ なし

### 【校注】

- (1) 底本は「鎖」字を欠く。文意により補う。
- (2) 底本は「析」に作る。文意により改める。
- (3) 底本は「殺」に作る。文意により改める。
- (4) 底本は「師」に作る。文意により改める。

### 【書き下し】

山陽に一人有り、名は僧儒。父子皆仏に事へて精進す。儒忽ち意に非ずして繋がれ、唯だ観世音を存念するのみ。数十日を得て、然して鎖便ち寸寸と自ら折れる。敢て輒ち去らず、以て主帥に語る。即ち復た鎖ぎして、堅牢なること前より倍す。又た少日を経るに、已に復た自ら断つ。爾の時篤民山陽を鎮め、此れを聞きて即ち之を放つ。

### 【訳】

山陽（江蘇省淮安県）にある人がおり、僧儒という名前であった。父子とも、仏に仕えてひたすら仏道に打ち込んでい

た。僧儒は突然思いがけず捕まって繋がれてしまい、ただ観世音のことだけを心で思っていた。数十日経つと、鎖がたちまち自然とずたずたに切れた。僧儒はあえてすぐに逃げ出さず、主帥にこのことを話した。役人はすぐに再び僧儒を鎖でつなぎ、以前の二倍鎖を堅固にした。また数日経つと、既にまた鎖はひとりでに断ち切れていた。当時、篤民が山陽をおさめていたが、このことを聞いて僧儒をすぐに釈放した。

### 【語注】

- ★ 僧儒＝僧侶の名。詳細不詳。
- ★ 寸寸＝ずたずたに。『世説新語』黜免第二十八「破視其腹中、腸皆寸寸断（破りて其の腹中を視れば、腸皆寸寸に断たる）」。
- ★ 主帥＝軍隊の総帥。
- ★ 篤民＝牧田書、董書では、人名ととるが詳細不詳。

### 【補説】

「観世音を念じたところ」鎖が切れた」という話としては、『大正新脩大藏經』卷五十三、『法苑珠林』卷十七、『太平広記』卷一百一十に収められている『冥祥記』の宋元嘉（四二四―四五三）はじめの張興の話がある。

(中国文学専攻 修士二年 岩田麻愛)

牧田書では、〔34〕の「杲外祖」までを〔33〕の本文とする。

確かに、「杲外祖」の下に空格が一字分あり改行、次の行から改めて話がはじまっているようにみえるが、〔34〕の張暢が陸杲の縁戚であることから、董書と同様に、「杲外祖」は〔34〕の本文とみなした。孫書は、〔33〕の本文としつつも〔34〕のものであろうと注記する。

(佐野誠子)

## 〔34〕

### 【本文】

杲外祖<sup>(1)</sup>、張會稽使君、諱暢、字景微<sup>(2)</sup>、吳人也。知名天下、爲當時民望。家奉佛法、本自精進。宋元嘉末<sup>(3)</sup>、爲荊州長史<sup>(4)</sup>、孝建初、徵還作吏部尚書、加散騎常侍。於時譙王丞相在荊州、自啓解南蠻府留使君、爲持節校尉<sup>(5)</sup>。領己長史、帶南郡如故。尋荊州作逆、使君格言諫之。丞相則欲見害、有求得免。丞相性癡。左右是用雖以諫見全、而隨衆口。每有惡意、即夢見觀世首<sup>(6)</sup>。輒語<sup>(7)</sup>「汝不可殺張長史<sup>(8)</sup>」。由此不敢害。及至丞相伏誅<sup>(9)</sup>、使君亦繫在廷尉<sup>(10)</sup>。誦『觀世音經』得千遍、鉗鎖遂寸寸自斷<sup>(11)</sup>。

於是喚獄司、更易之。咸驚歎以爲異。少日便事散。此杲家中事也。

### 【參考資料】

★『觀音義疏』卷上引『應驗伝』

★『太平広記』卷一百十一「張暢」出『談藪』

### 【校注】

- (1) 底本は「袒」に作る。史実により改める。
- (2) 底本は「徽」に作る。史実により改める。以下同。
- (3) 底本は「宗」に作る。史実により改める。
- (4) 底本は「吏」に作る。史実により改める。以下同。
- (5) 底本は「慰」に作る。史実により改める。
- (6) 底本は「承」に作る。史実により改める。
- (7) 底本は「兼」に作る。文意により改める。
- (8) 底本は「全」であるのか「令」であるのか判別しがたい。
- (9) 底本は「泉」に作る。この字の左に「〇」があり、その行の上に校注と思われる文字があるが、判読しがたい。牧田書以下がすべて「衆」とすることから、ひとまず「衆」とする。語注参照。

- (10) 底本は「輒」に作る。文意により改める。  
 (11) 底本は「長」字を欠く。文意により補う。  
 (12) 底本は「吏」に作る。史実により改める。  
 (13) 底本は「蒸」に作る。文意により改める。  
 (14) 底本は「庭」の異体字「逌」に作る。文意により改める。  
 (15) 底本は「慰」に作る。文意により改める。

【書き下し】

杲の外祖、張会稽使君、諱は暢、字は景微、呉の人なり。名を天下に知られ、当時の民望と為る。家仏法を奉じ、本より自ら精進す。宋の元嘉の末、荊州長史と為る。孝建の初め、微還りて吏部尚書と作り、散騎常侍を加ふ。時に于て譙王丞相荊州に在り、自ら啓し南蠻府を解きて使君を留め、持節校尉と為す。己の長史を領し、南郡を帯ぶること故の如し。尋いで荊州にて逆を作こし、使君言を格し之を諫む。丞相則ち害はんと欲するも、求め有りて免るるを得たり。丞相の性癡たり。左右是を用て諫を以て全うさると雖も、衆口に随はんとす。惡意有る毎に、即ち夢に觀世音を見る。輒ち語けて「汝張長史を殺すべからず」と。此れに由りて敢て害はず。丞相の誅

に伏するに至るに及び、使君も亦た繋がれて廷尉に在り。『觀世音經』を誦すること千遍を得たれば、鉗鎖遂に寸々として自ら断つ。是に於て獄司を喚び、更めて之を易ふ。咸驚歎し以て異と為す。少日にして便ち事散ず。此れ杲の家中の事なり。

【訳】

陸杲の外祖父である張会稽郡長官は、諱は暢、字は景微、呉の人であった。祖父の評判は天下に知られており、その時の人望を得る人であった。張家は仏の教えを守っていて、もと自分からひたすら仏道に打ち込んでいた。宋の元嘉年間（四二四―四五三）の末に、荊州長史となり、孝建年間（四五四―四五六）のはじめには、景微は中央に戻ってきて吏部尚書となり、さらに散騎常侍となった。その時、丞相であった譙王劉義宣は荊州にいて、自分から申し出て南蠻府校尉を解任してもらい、長官を引き留めて、持節校尉とした。張暢は、自分の長史を兼任し、南郡を統治することは前のままであった。まもなくして劉義宣が荊州で謀反をおこし、長官は劉義宣の発言を正して、彼を諫めた。丞相劉義宣は、そこで張暢を殺そうとしたが、他からの要求があつて張暢は殺されずに

すんだ。丞相の性質は愚かなところがあり、側近の者はそれゆえに諫めて張暢を助けたが、丞相はややもすると大勢の張暢の殺せという意見に従おうとした。張暢を殺そうという悪い考えが浮かぶたびに、劉義宣は夢で觀世音を見た。そのたびごとに觀世音が「お前は張長史を殺してはいけない」と伝えた。このため、劉義宣はどうてい張暢を殺すことができなかった。その後丞相が誅罰されることになったのに乗じて、咎めを受けた長官も繋がれて廷尉のいる刑獄にいた。そこで『觀世音經』を声に出して読むこと千回にもなったところ、首かせは、そのまま自然とずたずたに切れてしまった。そこで刑獄の役人と呼んで、もう一度この首かせを取り換えた。皆、非常に感心して素晴らしいと思った。日わずかにしてもう一連の事はもう解決してしまった。これは、陸杲の親戚の者の中で起こった事である。

# 【語注】

★ 張暢Ⅱ人名。『宋書』卷五十九に伝あり。四〇八―四五七。  
また『宋書』卷四十六、『南齊書』卷四十一、『南史』卷三十二の張邵伝中にも伝がある。呉郡（江蘇省）呉の人。  
大明元年（四五七）、五十歳の時に在職のまま死去した。

★ 景微Ⅱ『宋書』や『南史』にある伝では「少微」とある。  
★ 會稽使君Ⅱ「使君」は長官の尊称。『宋書』卷五十九張暢伝に「孝建二年（四五五）、出爲會稽太守」とある。  
★ 民望Ⅱ人々からの信頼。『宋書』卷五十九張暢伝に「別立軍部、以收民望（別に軍部を立て、以て民望を収む）」とある。

★ 長史Ⅱ官名。魏晉以降、王公府の属官。後世は刺史の副官を指す。史書には張暢が「荊州長史」になったという記述はみえない。

★ 吏部尚書Ⅱ官名。『宋書』、『南史』の張暢伝には、元嘉三十年（四五三）に「微爲吏部尚書、封夷道縣侯」とある。本文では元嘉の次の年号である「孝建初」のこととなっている。

★ 散騎常侍Ⅱ官名。南朝の時には散騎省から集書省となり、主に図書公文書、撰述、諫言の拾遺、取り次ぎした公文書の受け入れなどを行った。『宋書』や『南史』の張暢伝には「散騎常侍」になったという記述はみえない。

★ 譙王丞相Ⅱ南郡王、劉義宣のこと。『宋書』卷六十八、『南史』卷十三に伝あり。『宋書』の南郡王義宣の伝には元嘉二十一年（四四四）には荊州刺史に、元嘉三十年（四五

三)には荊湘二州刺史になったとある。また『宋書』の張暢伝には「故以暢爲南譙王義宣司空長史、南郡太守。(中略)義宣既有異圖、蔡超等以暢民望、勸義宣留之、乃解南蠻校尉以授暢、加冠軍將軍、領丞相長史(故に暢を以て南譙王義宣の司空長史、南郡太守と爲す。〔中略〕義宣既に異図有り、蔡超等暢の民望を以て、義宣に之を留むるを勸む。乃ち〔義宣〕南蠻校尉を解きて以て暢に授く、〔張暢〕冠軍將軍を加へ、丞相長史を領す」とある。

持節校尉「持節」は、節(天子から授けられた使者の印である旗)を持つこと。「校尉」は官名。武職の榮名とされたが、後に散官となり將軍の次の位を指した。「持節校尉」という呼称は他にみられず。

左右是用雖以諫見全、而隨衆口(この箇所は、參考資料にこの部分に該当する記述がなく、文字の決定も含めて難しい。前後の文脈をつなげるために、丞相劉義宣は、前文にあつたように、諫めを受け入れて、張暢の命を救ったが、殺すべきであるという大勢の意見に従い、(再び)殺そうという悪い気持ちがあがった、と解釈してみたが待考。董書は、『宋書』張暢伝にある処刑を免れたあと、酒ばかり飲んで書類を見なかったという記述(補説

参照)を根拠に「張暢は、他の人の諫めによって一命を取り留めたのち、人の流れにまかせ、自分の意見をあらわさなかった。」と訳し、そのあとに( )で「劉義宣の身辺の小人物が、張暢について安心せず、いつも劉義宣に張暢を殺すように勸めていた」との補足をつけている。

★ 廷尉「官名。罪の訴訟を掌り、郡国の疑獄も担当した。『晋書』卷三十三何曾伝に「芝繫在廷尉、顧影知命、計日備法(何曾の娘)芝繫がれて廷尉に在り、影を顧みて命を知り、日を計りて法を備ふ)」。『宋書』卷五十九の張暢伝に「送京師、下廷尉、削爵土(京師に送られ、廷尉に下り、爵土を削らる)」とあり史実と一致する。

#### 【補説】

「廷尉に在り」のこの部分に至るまでの話の流れは、『宋書』卷五十九の伝では次のようになっていいる。「義宣將爲逆、遣嬖人翟靈寶謂暢『朝廷簡練舟甲、意在西討、今欲發兵自衛』。暢曰『必無此理、請以死保之』。靈寶知暢不回、勸義宣殺以徇衆。即遣召暢、止于東齋、彌日不與相見、賴司馬竺超民保持、故獲全免。既而進號撫軍、別立軍部、以收民望。暢雖署文檄、而飲酒常醉、不省文書。隨義宣東下、梁山戰敗、義宣奔走、暢於

兵亂自歸、爲軍人所掠、衣服都盡。值右將軍王玄謨乘輿出營、暢已得敗衣、排玄謨上輦、玄謨意甚不說、諸將欲殺之、隊主張世營救得免。送京師、下廷尉、削爵土、配左右尚方。尋見原（劉）義宣將に逆を爲さんとし、嬖人翟靈宝を遣りて暢に謂はしむ『朝廷舟甲を簡練するは、意西討に在り、今兵を発して自ら衛らんと欲す』と。暢曰く「必ず此の理無く、請ふ死を以て之を保つを」と。靈宝暢の回らざるを知り、義宣に殺して以て衆に徇<sup>とよ</sup>へんことを勧む。即ち暢を召さしめ、東齋に止め、彌日与に相見えず、司馬竺超民の保持するに頼りて、故に全く免るるを獲たり。既にして号を進め撫軍し、別に軍部を立て、以て民望を収む。暢文檄を署すと雖も、酒を飲みて常に酔ひ、文書を省みず。義宣に随ひて東下し、梁山戰敗れ、義宣奔走し、暢兵乱に於いて自ら歸し、軍人の掠む所と爲り、衣服都て尽く。右將軍王玄謨の輿に乗りて營を出づるに值り、暢已に敗衣を得て、玄謨を排して輦に上り、玄謨意甚だ説ばず、諸將之を殺さんと欲し、隊主張世營救ひて免るを得る。京師に送られ、廷尉に下り、爵土を削られ、左右尚方に配せらる。尋いで原<sup>ゆゑ</sup>さる（一）。

張暢は劉義宣に捕えられていたところを劉義宣の腹心の臣下であつた竺超民に助けられ、次に兵乱に巻き込まれて衣服

を取られたが、王玄謨に助けられ、また將軍たちに殺されそうになつたところを張世に助けられて免れたというものである。ここでは話が簡潔にまとまっていることがわかる。

本話は、張暢の史実とほぼ合致し、さらに元嘉末に荊州長史になつたことなどは正史を補う内容となつてゐる。詳しい考証が牧田書注（56）にみられる。

（中国文学専攻 修士一年 林美江）

陸杲の妻の一族である呉郡張氏は、仏教信仰にあつた一族であり、その信仰の様相は、撫尾正信「呉郡張氏と仏教」（『龍谷史壇』五六・五七合併号、一九六六）、南部松雄「呉郡張氏における精神活動」（『相愛女子大学相愛女子短期大学研究論集』一五、一九六八）に詳しい。また、その仏教信仰をする家庭内環境で、このような応驗譚が語られていたのであることは、小南一郎「六朝隋唐小説史の展開と仏教信仰」（福永光司編『中国中世の宗教と文化』京都大学人文科学研究所一九八二）があり、四三〇頁において『繫觀世音応驗記』に張氏一族から話が伝達した痕跡がみられるとの指摘があるが、本条については触れられていない。次の（35）の張の話も呉郡張氏の一人である可能性があり、また（38）では呉郡張氏の一族と確認できる人物が陸杲とともに応驗譚を聞いたこと

がしるされる。

(佐野誠子)

[35]

【本文】

張達者、曾繫獄應死。既無復他冀、唯誦『觀世音經』。近得千遍、而鉗鎖皆折。少日得出、遂爲道人。

【參考資料】

★『弁正論』卷七注所引『張氏別伝』

★『太平広記』卷一百十一「張達」出『張氏伝』

【校注】

(1) 底本は「誦」字を欠く。文意により補う。

【書き下し】

張達は、曾て獄に繋がれて心に死すべし。既に復た他に冀ふ無く、唯だ『觀世音經』を誦ずるのみ。近く千遍を得て、鉗鎖皆折る。少日にして出づるを得、遂に道人と爲る。

【訳】

張達は、かつて投獄され死刑となった。依然としてやはり他に助かる望みはなく、ただ『觀世音經』をとなえるだけだった。千回近くになると、枷と鎖がすべて折れた。日わずかにして、釈放され、そこで、僧侶となった。

【語注】

★張達Ⅱ人名。詳細不詳。『三国志』や『北史』に張達という名前の人物がみえるが、同一人物であるとの証拠はない。前話からの流れを考えると、張氏一族の一人であった可能性がある。

★冀Ⅱ希望。願い。

(中国文学専攻 学部三年 加藤薫)

【補説】

『弁正論』及び『太平広記』にみえる文章は、両者ほぼ同文である。『繫觀世音心験記』同様短いが、少し内容が違うため、ここに載せる。「張達有罪繫獄。分當受死。乃專念觀音。鎖械自脱。因遂獲免。終身齋戒」(『弁正論』による)、『太平広記』は「觀音」を「觀世音」に作る)。こちらでは、出家ではなく齋戒をした、となっている。

両者の出所となっている『張氏（別）伝』については、『隋志』等に著録なく不詳。呉郡張氏に関する別伝だったのかもしれない。ほかに同一と思われる書名がみえるのは、『仏祖統記』に「賈氏、釋道安之門人。其英姿朗韻、清行素節。詳諸舊碑及『張氏傳』（賈氏、釈道安の門人なり。其れ英姿朗韻にして、清行素節なり。諸旧碑及び『張氏伝』に詳かなり）」とあるのみのようである。

（佐野誠子）

## 〔36〕

### 【本文】

王穀、建徳郡人也。爲黃龍國守庫吏。器物耗散、罪當至死。心念耗在己藏、而罪無所逃、即便至心誦『觀世音經』。得千遍、身上鎖械悉斷絶。又恒聞異香、心益傾至。少日、遂意外得免焉。

### 【参考資料】

★『法華伝記』巻六

### 【校注】

- （1）底本は「使」に作る。『法華伝記』により改める。  
（2）底本は「項」に作る。文意により改める。

### 【書き下し】

王穀は、建徳郡の人なり。黄竜国の守庫吏爲り。器物耗散し、罪当に死に至るべし。心念するに耗は己の蔵に在りて、罪より逃がるる所無し、即便<sup>すなは</sup>ち至心にして『観世音經』を誦す。千遍を得れば、身上的鎖械悉く自ら断絶す。又た恒に異香を聞けば、心益す傾き至る。少日にして、遂に意外にも免るるを得たり。

### 【訳】

王穀は建徳郡（河北省徐水県）の人である。黄竜国（遼寧省朝陽）の守庫吏であった。倉庫の器物がすっかりなくなつてしまい、死罪となつた。王穀は心の中で考えてみて、なくなつてしまったのは、自分の管理下の倉庫であつたため、刑罰からは逃れようもなかった。ただちにまごころをもつて『観世音經』をとこなえ千回に及ぶと、からだにつけられた鎖や枷

がすべてひとりでに断ち切れた。また、いつもどこからか不思議な匂いがしたため、王穀の気持ちはますますひとすじに極まった。日わずかにして、思いのほか釈放された。

### 【語注】

★ 王穀Ⅱ人名。詳細不詳。

★ 黃龍國Ⅱ五胡十六国時代の国である北燕（四〇七―四三六）に對する南朝での呼称。馮跋が黃竜府すなわち竜城に建国した。『宋書』卷九十七東夷高句驪国伝に「先是、鮮卑慕容寶治中山、爲索虜所破、東走黃龍。義熙初、寶弟熙爲其下馮跋所殺、跋自立爲主、自號燕王、以其治黃龍城、故謂之黃龍國（先には、鮮卑慕容寶中山を治め、索虜の破る所と爲り、東のかた黃竜に走る。義熙の初め、寶の弟熙 其の下の馮跋の殺す所と爲り、跋 自ら立ちて主と爲り、自ら燕王と号す。其の治の黃竜城を以て、故に之を黃竜国と謂ふ）」とある。

★ 守庫吏Ⅱ倉庫番の役人の呼称と考えられる。補説参照。

★ 耗散Ⅱすっかりなくなること。『梁書』卷三武帝紀「侵割耗散官物、無問多少、亦悉原除（官物を侵割耗散するは、多少を問ふ無く、亦た悉く原除せよ）」。

### 【補説】

守庫吏は、倉庫守衛官吏の名称と思われる。参考資料の『法華伝記』では、「黃龍國守」と「庫吏」に分かれており、王穀が「黃龍國守」で、器物を耗散した主体は「庫吏」となっている。また、〔21〕に見られる類話では「庫吏」が登場するため、これらによれば「黃龍國守」と「庫吏」に分けて解釈することも可能である。しかし、次の〔37〕には、張達と同じ建徳郡の人で黃龍国の典炭吏である孫欽が物資の耗散によって死刑とされる話があり、〔36〕と〔37〕は、地域と国も同じな類話である。そこで語句を対応させて考えると、「黃龍國守庫吏」に〔37〕の「黃龍國典炭吏」が対応するため、「黃龍國守庫吏」と一語で解釈することが可能であり、訳はこちらに従った。典炭吏は木炭を管理する官職と思われるが、これも同様に未詳である。この二話は、同一人物から聞いた話を連続して書き留めたものと考えられる。

（中国文学専攻 学部三年 加藤 薫）

『法華伝記』は、「在己蔵」を「非己蔵」に作り、王穀は自分の責任でない罪を負わされたこととなっている。ただし、これまでの応驗譚では、本人が罪を犯していることさえ、観世音信仰によって死罪を免れた話があり、自らが犯した罪であつ

た可能性もある。また、『法華伝記』では、「又恒聞」以下の文がなく、「人謂希有矣（人謂へらく希<sup>まれ</sup>に有るなり）」との言葉で締めくくっている。

（佐野誠子）

## 〔37〕

### 【本文】

孫欽、建徳郡人也。爲黄龍國典炭吏<sup>(1)</sup>。亦減耗、應死。誦『觀世音經』、得三百遍、覺身意自好、不復愁。鎖械自寛、隨意得脱。自知無他、所以不走。少時遇赦得散。欽性好畋魚殺害、從此精進<sup>(5)</sup>。

### 【参考資料】

＊なし

### 【校注】

（1）底本は「灰」に作る。文意により改める。

（2）底本欠損あり判読し難し。牧田書は「火」に孫書は「失」に董書は「亦」に翻字する。ひとまず「亦」とする。

（3）底本は「咸」に作る。文意により改める。  
（4）底本は「遍」に作る。文意により改める。  
（5）底本は「此」字を欠く。文意により補う。

### 【書き下し】

孫欽は建徳郡の人なり。黄竜国の典炭吏爲り。亦た減耗し、応に死すべし。『觀世音經』を誦して三百遍を得、身意自ら好きを覚え、復た愁へず。鎖械自ら寛たりて、意に随ひて脱するを得たり。自ら他無きを知り、所以に走らず。少時赦に遇ひて散<sup>はな</sup>たるを得たり。欽の性は畋魚殺害するを好むも、此れ従り精進す。

### 【訳】

孫欽は建徳郡（河北省徐水県）の人であつた。黄竜国の典炭吏であつた。王穀と同じくまた物資が減つて、罪に問われ死ななければならなかつた。『觀世音經』をとこなえること三百回にして、身体と心とが自然と好調になるのを感じ、以前のように憂いを感じることはなかつた。鎖や枷は自然と緩まり、思うままにはずすことができた。自ら逃亡する気はなかつた

ので、脱走しなかった。しばらくして、恩赦にあつて、釈放された。孫欽の性格は狩猟や漁業をして、殺生することを好むものであったが、このことがあつてから精進に励んだ。

### 【語注】

★ 孫欽Ⅱ人名。詳細不詳。

★ 黃龍國Ⅱ〔36〕語注参照。

★ 典炭吏Ⅱこの官職名は未詳であるが、董書では清・黃本驥の『歷代職官表』巻四・内務府において宋齊梁陳代におかれた「炭庫柴署令、丞」があつたとされるうちの、炭庫令ではないかと指摘されている。宮廷の木炭を管理する職であつたらしい。なお、表には南朝の官職しかみえないが、附属の瞿蛻園による『歷代職官概述』には「北朝の官職制度は代替の上において南朝の影響を受けた」とある。そのため、南朝における炭庫令に相当する官職が北朝においても存在したと考えられる。「典炭吏」はその呼称であろう。

★ 亦Ⅱ校注（2）参照。〔36〕と経緯が似ていることを示しているか。

★ 減耗Ⅱ一定数あるべき物資が減ってしまったことを指す。

『三国志』巻五十七賈統伝には「疆鄰大敵非造次所滅、疆場常守非期月之戍、而兵民減耗、後生不育（疆鄰大敵は造次の滅ぼす所に非ず、疆場常を守るは期月の戍に非ず、而るに兵民減耗し、後生育たず）」とある。ここでは、後世のためにある程度の数があるべき兵士や人民が減っていることを言っている。

★ 敗魚Ⅱ敗漁に同じ。狩猟と漁業。『北史』巻十九魏咸陽郡王坦伝「性好敗漁、無日不出。秋冬獵雉兔、春夏捕魚蟹、鷹犬常數百頭（性敗漁を好み、日に出でざる無し。秋冬は雉兔を獵し、春夏は魚蟹を捕へ、鷹犬は常に百頭を數ふ）」。

★ 殺害Ⅱ仏教説話であることを考慮に入れると、ここでは「殺生」の意味であると解すべきだろう。

★ 精進Ⅱ仏道に励むの意で「精進」の語がたびたびでているが、ここでは、その前に狩猟を好んでいたことが書かれているため、日本語の精進のように、殺生をせず、生臭物を食べない、の意が強くでている。

（中国文学専攻 学部三年 五藤嵩也）

## 【本文】

唐永祖、建康人也。宋孝武時、作大市令、爲藏盜被收。臨收日、遇見相識道人、教其念敬觀世音。永祖雖本不信向、而事急爲之。在建康獄、經六日、晝夜存念、兩脚著鎖忽然自脫。永祖盜更最著、不復得入。其告獄司、建康令爲啓孝武。孝武謂其昔肥今瘦、勅更爲作急鎖。永祖既見靈驗、益增至到。復三日、言夜中、遂陋屋有光、脚鎖一時寸折。獄中大驚。建康史以事啓孝武、嘆曰「我欲殺儉、不知佛又何意念之。今若害違佛」。即勅放出。永祖出、即推宅爲寺。請道人齋會。郢州僧統釋僧顯、爾時親受其請、具知此事、爲臯說之。臯舅司徒左長史張融、從舅中書張緒同聞其說。

## 【參考資料】

★ なし

## 【校注】

（一）底本は「君丞相祖」に作る。目錄部分により、「永祖」に改める。

（二）底本は「散」に作る。文意により改める。

（三）「永祖」、底本は「丞相」に作る。目錄部分により改める。以下同。

（四）底本は「李」に作る。文意により改める。

（五）底本は「司」に作る。左側にミセケチ。上部に「囧」（日本においては「同」の異体字として用いられる）との訂正あり。

（六）底本は「間」に作る。文意により改める。

## 【書き下し】

唐永祖は、建康の人なり。宋孝武の時、大市令と作り、藏盜を爲して収めらる。収めらるる日に臨み、遇ま相識る道人に見え、其の觀世音を念じ敬ふを教はる。永祖本より信向せざると雖も、事急なりて之を爲す。建康の獄に在りて、六日を経て、晝夜存念するに、兩脚の著きし鎖忽然として自ら脱す。永祖盜かに更めて最め著くるも、復た入るを得ず。其れ獄司に告げ、建康の令爲に孝武に啓す。孝武其れ昔肥え今瘦せるを謂ひ、勅して更めて急なる鎖を作るを爲さしむ。永祖既に靈驗を見るに、益増して至到す。復た三日して、夜中

に言ふに、遂に陋屋に光有り、脚鎖一時に寸折す、と。獄中大いに驚く。建康の吏事を以て孝武に啓し、嘆じて曰く「我儉を殺さんと欲するも、仏は又た何の意ありてか之を念ふを知らず。今若し害すれば、仏に違はん」と。即ち勅して放出せしむ。永祖出でて即ち宅を推して寺と爲し、道人に請ひて齋会す。郢州の僧統釈僧顓、爾の時親しく其の請を受け、具さに此の事を知り、杲の為に之を説く。杲の舅の司徒左長史張融、從舅の中書張緒も共に其の説を聞く。

### 【訳】

唐永祖は、建康（江蘇省南京）の人である。宋の孝武帝（在位四五三―四六四）のときに大市令となり、蔵から物を盗んだために収監されることになった。収監される日になって、たまたま面識のある道人にあり、道人から、觀世音を念じて敬うことを教わった。永祖は元々觀世音を信仰していなかったが、事が迫っているのをそれを実行した。建康の牢獄で六日経ち、昼夜常に心で觀世音のことを思っていると、両脚についていた鎖が突然ひとりで外れた。永祖はこっそりと付いていた鎖を更めて集めて取ってつけようとしたが、再び入れることができなかった。そこで、牢獄の役人に告げた。建康の

役人はそのために孝武帝に申し上げた。孝武帝は、永祖が前は太っていたのが、今は痩せたのだと思い、さらにきつく鎖で縛るように命じた。永祖は既に觀世音のしるしを見ていたため、益々信仰の心を極めた。再び三日後、夜中に牢獄に光が放たれ、脚に付いていた鎖が一挙にズタズタに切れた、と言った。牢獄内の人は大いに驚いた。建康の役人はこの事を孝武帝に申し上げると、孝武帝は嘆いて「私は盗人を殺したいと願ったが、仏はなぜかわからないが、彼に思いをかけている。今もし彼を傷つければ、仏に背くことになるだろう」と言った。そこで、永祖を解き放つように命じた。永祖は、獄から出たあと、すぐに自宅を寺に寄進して、僧に頼んで齋会をした。郢州（湖北省武昌県）出身の僧統である釈僧顓は、当時自らその頼みを受けたことで、詳しくこの出来事を知り、陸杲のために話してくれた。陸杲の舅である左長史の張融や、母方のいとこである中書の張緒も同じようにその話を聞いた。

### 【語注】

- ★ 唐永祖Ⅱ人名。詳細不詳。
  - ★ 孝武帝Ⅱ劉宋の第四代皇帝劉駿。字は子龍。諡は孝武。
- 『宋書』巻六に本紀あり。

★ 大市令Ⅱ官名と思われるが、詳細不詳。大規模な市場の管理をつかさどったか。

★ 盗Ⅱひそかに。『搜神記』巻十六「夜伺其寢後、盜照視之（夜其の寝る後を伺ひ、盜かに照らして之を視る）」。

★ 最Ⅱ集める。董書は「最」字を「取」（最の異体字）とした上で、「取」字に訂正している。

★ 推Ⅱゆずる。『南史』巻二十五垣護之伝景賓伝「鎮之又推齋屋三間與之、亦不肯受（鎮之又た齋屋の三間を推して之に与へんとするも、亦た肯へて受けず）」。

★ 僧統Ⅱ僧侶の位称。『大宋僧史略』巻中にある「僧統」の項目には「秦制關中、立僧正爲宗首。魏尊北土、改僧統領緇徒（秦関中を制し、僧正を立て宗首と爲す。魏北土を尊び、僧統に改めて緇徒を領べしむ）」としるされている。

★ 僧顯Ⅱ僧侶の名。『広弘明集』巻二十四元魏孝文帝「帝以僧顯爲沙門都統詔」に「今以思遠寺主法師僧顯（今思遠寺の主法師僧顯を以てす）」との記述がある。補説参照。

★ 司徒左長史Ⅱ官名。魏晋南北朝に置かれる。司徒右長史より位は上。魏・晋・宋のときは六品。

★ 張融Ⅱ人名。南齊、呉郡の人。字は思光。四四四―四九九

七。『南齊書』巻四十一、『南史』巻三十二に伝あり。陸果の妻の父親にあたる。

★ 從舅Ⅱ『爾雅』釈親に「母之從父舅弟爲從舅（母の從父<sup>けいてい</sup>舅弟を從舅と爲す）」とあるように母方のいとこの意味であるが、実際は、張緒は、舅張融の父方のはとこにあたる。補説参照。

★ 張緒Ⅱ人名。南齊、呉郡の人。字は思曼。諡は簡。四二三―四八九。『南齊書』巻三十三、『南史』巻三十一に伝あり。父の張演は『続光世音応驗記』の著者。

（中国文学専攻 修士二年 岩田麻愛）

### 【補説】

僧顯は現在残される他の記録では、北朝で僧統の職についていたことが情報のほぼすべてである。同一人物であるとするならば、本話で出身が郢州（湖北省武昌県）であり、南朝にもいたことが判明すること、貴重な資料といえよう。ちなみに、山崎宏『支那中世仏教の展開』（法蔵館一九七一、もと清水書店一九四二）第二章南北朝時代における僧官の検討や、塚本善隆『魏書釈老志の研究』（『塚本善隆著作集』第一巻、大東出版社一九七四、原著一九六一）などで、僧顯の僧統になっ

た年についての検討がなされ、史書の年号記述に矛盾があることが指摘されている。山崎書では僧顓が僧統になったのは、太和三年（四七九）以降であるとする。この話の事件が起きた年代はこれよりも前であるため、僧顓は、はじめ南朝で活動したのちに、北魏に移ったのであろうか。

また、僧顓が陸杲や張融、張緒にこの話をした時期も南朝にいたとすることなのか、北朝に移ったあと南に来ることがあり、その際に話したことであるのかなどが気になるが、特定することができない。もし、北朝に移る前であれば、四五九年生まれの陸杲がかなり若いころに聞いたこととなる。

この話は〔33〕に引き続き、陸杲と姻戚関係のある呉郡張氏の一族の名前が登場する。呉郡張氏と仏教信仰の関係については、すでに〔33〕補説において解説した。張融の祖父張禕と張緒の祖父張裕が兄弟であり、融と緒が同一世代である。

（佐野誠子）

## 〔39〕

### 【本文】

韓幼宗<sup>(1)</sup>兄子、名徽、客居枝江<sup>(2)</sup>。宋末、幼宗作湘州府中兵。昇明元年、荊州刺史沈攸之<sup>(5)</sup>下代朝廷、湘府長史庾珽<sup>(6)</sup>玉據州中立。庾遂疑殺幼宗、收徽、付長沙獄、重鎖械、又將殺之。徽本事佛、能誦『觀世音經』。於是晝夜誦經、至數百遍、忽然鎖械大鳴、如燒瓦石侈陀。發衣見之、盡解在床上。徽恐獄家言己毀、遽喚告之。吏雖驚異、而加釘鎖。又諷誦得一日、鎖械復鳴侈自解。吏乃具告佩玉、佩玉取鎖視之、服其誠感。即日見放。

### 【參考資料】

- ★ 『法苑珠林』卷二十七所引『冥祥記』
- ◇ 『冥祥記』第一一九話

### 【校注】

- (1) 底本は「幻宋」に作る。史実により改める。以下同。
- (2) 底本は「枚」に作る。『法苑珠林』が「支」に作ることに及び実在の地名により改める。

(3) 底本は「未」に作る。文意により改める。

(4) 底本は「丘」に作る。史実により改める。『続光世音庇驗記』六話にも「兵」字を「五」に作る例あり。衣川

賢二「張演『續光世音庇驗記』訳注(下)」(『花園大学文学部研究紀要』三三、二〇〇一) 九七頁参照。

(5) 底本は「修」に作る。史実により改める。

(6) 底本は「佩」に作る。史実により改める。

### 【書き下し】

韓幼宗の兄子、名は徽、枝江に客居す。宋末、幼宗湘州府中兵と作る。昇明元年、荊州刺史沈攸之下りて朝廷に代はらんとするも、湘府長史庾佩玉州に據りて中立す。庾遂に疑ひて幼宗を殺し、徽も収め、長沙の獄に付し、鎖械を重ね、又た將に之を殺さんとす。徽本より仏に事へ、能く『觀世音經』を誦す。是に於いて昼夜誦經し、数百遍に至るに、忽然として鎖械大いに鳴り、瓦石を焼くが如く<sup>た</sup>炒咤す。衣を弁して之を見るに、尽く解かれて床上に在り。徽獄家の己が毀つと言ふを恐れ、遽に喚びて之を告ぐ。吏驚異すると雖も、加へて鎖を釘うつ。又た誦誦して一日を得るに、鎖械復た鳴炒して

自ら解ける。吏乃ち具さに佩玉に告ぐ。佩玉鎖を取り之を視て、其の誠感に服す。即日<sup>に</sup>放たる。

### 【訳】

韓幼宗の兄の子で名は徽という者がいた。枝江(湖北省江陵県の西)に住んでいたことがあった。宋の末、韓幼宗は湘州(湖南省湖北省一帯)府の中兵となった。昇明元年(四七七)、荊州刺史の沈攸之が東下して朝廷(建康)に取って代ろうとしたが、湘府長史の庾佩玉は湘州にいたままで、朝廷、沈攸之のどちらにもつかなかった。庾佩玉はそして韓幼宗を疑って彼を殺し、さらに兄の子である韓徽も捕らえて、長沙(湖南省長沙県)の牢獄に託し、鎖と手枷を重ねてつけ、さらに韓徽を殺そうとした。韓徽はもともと仏に帰依していて、『觀世音經』をそらんじることができた。そこで昼も夜も『觀世音經』を唱えて、数百回に達した時、突然、手枷が盛んに鳴り始め、瓦や石を焼いている時のように大きな音がした。服を除けて露わにさせて手枷を見てみると、全てばらばらになつて寝台の上にあった。韓徽は、牢獄の役人に自分で手枷を壊したと言われるのを恐れて、すぐに役人を呼び寄せて手枷が壊れたことを知らせた。役人は驚き怪しんだが、さらに鎖を

釘うちつけた。さらに、『観音世経』を声に出して読んで一日経ったところ、鎖と手枷が再び盛んに鳴り出して自然にとれてしまった。役人はそこで庾佩玉に詳しくこのことを知らせた。庾佩玉は鎖を手にとつてよく見、彼の観世音への真心の通じたことによる靈驗に恐れ入った。そのため韓徽は、その日のうちに釈放された。

### 【語注】

★ 韓幼宗Ⅱ中兵参軍・臨湘令の職にあり、湘州を守つていた。『宋書』卷八十三黄回伝に記述がみえる。

★ 韓徽Ⅱ人名。この話で「韓幼宗の兄の子」であることがわかる以外、詳細不詳。

★ 客居Ⅱ故郷でない土地にいる。『史記』卷九十二淮陰侯列伝「漢兵二千里客居（漢兵二千里客居す）」。

★ 中兵Ⅱ中兵参軍のことか。両晋・南北朝の諸侯、軍府僚属の一つ。府の中兵曹の職務もつかさどり、戦略などの相談役を兼ねていた。韓幼宗が中兵参軍であつたことは、補説参照。

★ 沈攸之Ⅱ人名。宋、呉興武康の人。字は仲達。戦功を重ねて四方を平定し、朝廷に対して何度も謀反を起こした。

『宋書』卷七十四、『南史』卷三十七に伝あり。荊州刺史になつたことについては、『宋書』の伝によると、泰豫元年（四七二）に荊州刺史となつており、続いて元徽四年（四七六）に車騎大將軍に拔擢されており、荊州刺史をそのまま兼任していたかはわからない。

★ 庾佩玉Ⅱ人名。『南史』卷七十三李義伝上の中の記述では、庾沙彌の父で、南朝宋に仕え、長沙内史の職にいたとある。『宋書』卷八十三黄回伝中にも記述がみえる。湘州長史になつたことについては補説参照。

★ 炆咤Ⅱ盛んに鳴る。「炆」は盛んな火の様子があり、「咤」には怒つて大声でどなるといふ意味がある。本文で後に「鳴炆」の表現もある。

★ 獄家Ⅱ牢獄の役人。『法苑珠林』卷二十七に「子喬雖知必已、尚慮獄家疑其欲叛（彭）子喬必ず已むを知ると雖も、尚ほ獄家の其の叛かんと欲するを疑ふを慮る」とみえる。この話は、次の（40）の彭子喬と同話。

★ 誠感Ⅱ真心が通じたことによる靈驗。『南史』卷四十九劉歊伝「母每疾病、夢歊進藥、及翌日、轉有間効、其誠感如此（母疾病する毎に、〔劉〕歊の藥を進むるを夢みて、翌日に及び有間に転じ効あり、其の誠感此くの如し）」。

## 【補説】

この事件の顛末については、『宋書』卷八十三黄回伝にも記述がある。「先是、王蘊爲湘州、潁川庾佩玉爲蘊寧朔府長史、長沙内史。蘊去職、南中郎將、湘州刺史。南陽王勰末之任、權以佩玉行府州事。先遣中兵參軍、臨湘令韓幼宗領軍戍防湘州、與佩玉共事、不美。及沈攸之爲逆、佩玉、幼宗各不相信、幼宗密圖、佩玉知其謀、襲殺幼宗（先には是れ、王蘊湘州と爲り、潁川の庾佩玉蘊の寧朔府長史、長沙内史と爲る。蘊職を去り、南中郎將、湘州刺史南陽王勰未だ任に之かず、權に佩玉を以て府州の事を行はしむ。先に中兵參軍、臨湘令韓幼宗を遣り軍を領し湘州を戍防せしめ、佩玉と共に事ふるも、美からず。沈攸之の逆を爲すに及び、佩玉、幼宗各の相信せず、幼宗密かに図り、佩玉其の謀を知り、幼宗を襲殺す）。このように庾佩玉と韓幼宗の反目、そして庾佩玉が韓幼宗を殺害したことがしるされる。また、ここでは、庾佩玉は湘州刺史の代行を行つてはいるが、湘州長史ではない。

『法苑珠林』に引用される『冥祥記』の同話では、「湘府長史庾佩玉阻甲自守。未知所赴。以幼宗猜貳殺之。戮及妻孥。戮以兄子繫于郡獄（湘府長史庾佩玉甲に阻りて自ら守る。未知赴く所を知らず。幼宗以て猜貳して之を殺す。戮妻孥に及

び、戮兄の子なるを以て郡獄に繋がる」とある。

（中国文学専攻 修士一年 林美江）

## 〔40〕

### 【本文】

彭子喬者、益陽人也。作本郡主簿、觸逋太守沈文龍、見執付獄、欲逐殺之。子喬少時出家還俗、故恒誦『觀世音經』。于時文龍必欲殺子喬、判無復冀、唯至心誦經。得百有餘遍。既大疲極、暫晝得眠、同繫者有十餘人亦復睡臥。有湘西縣吏杜道榮亦在獄中、時如眠非眠、不甚得熟。因恍惚中、見有兩白鶴集子喬屏風上。須臾、一鶴下子喬邊、或復如似人、形容至好。道榮心怪之、起視子喬、見其雙械脫在脚、復械雍猶尚著脚。道榮大驚喚、子喬覺、道榮問「向得夢不」。子喬答曰「不夢」。道榮爲說其所見、歡喜不可言。自還著械不使人知。得四五日、遂非意放散。義安太守太原王琰、與杲有舊、作『冥祥記』。道其族兄璉識子喬及道榮、聞二人說、皆同如此。

右廿二條、『普問品』云「檢繫其身」。

### 【參考資料】

★『法苑珠林』卷二十七所引『冥祥記』

★『法華伝記』卷六引『法苑珠林』

★『太平広記』卷一百十一「彭子喬」出『法苑珠林』

◇『冥報記』第一二五話

### 【校注】

(1)底本は「高」に作る。目録及びその他参考資料すべてが「喬」に作ることから、「喬」に改める。以下同。

(2)底本は「薄」に作る『法苑珠林』等により改める。

(3)底本では「遂」字は右に書かれ、挿入記号「〈」あり。

(4)底本は「垣」に作る。『法苑珠林』『太平広記』は「常」に

『法華伝記』は「恒」に作る。『法華伝記』により改める。

(5)底本は「湘」字を欠く。『法苑珠林』等により補う。

(6)底本は「史」に作る。『法苑珠林』等により改める。

(7)底本は「雨」に作る。『法華伝記』により改める。『法苑

珠林』『太平広記』は「雙」に作る。

(8)底本は「似是人」に作る。「是」を衍字としてとる。

(9)底本は「雍」に作る。『法苑珠林』は「癰」、『太平広記』

は「痕」に作る。『法苑珠林』により改める。

(10)底本は「答曰云」に作る。文意からして「曰云」の二字

のうち一字は衍字である。『法華伝記』等により改める。

(11)底本は「義」に作る。文意により改める。

(12)底本は「與」字を欠く。『法華伝記』により補う。

### 【書き下し】

彭子喬は、益陽の人なり。本郡主簿と作る。太守沈文龍に触<sup>しよく</sup>連し、執らへられ獄に付され、之を殺すことを遂げんと欲す。子喬少時に出家し還俗し、故に恒に『観世音経』を誦す。時に于て文龍必ず子喬を殺さんと欲し、復た冀ふ無きを判かり、唯だ至心にして誦経す。百有餘遍を得。既に大いに疲れ極まり、暫く昼眠るを得、同に繋がるる十餘人も有り亦復た睡臥す。湘西県吏杜道榮有りて亦た獄中に在り、時に眠るが如くして眠るに非ず、甚だしくは熟するを得ず。因りて恍惚の中に両白鶴有りて子喬の屏風の上に集<sup>とど</sup>まるを見る。須臾にして、一鶴子喬の辺りに下り、或いは復た人に似るが如く、形容至つて好し。道榮の心之を怪しみ、起きて子喬を視れば、其の双械脱して脚に在り、復た械癰<sup>かいもち</sup>の猶<sup>な</sup>尚ほ脚に著<sup>つ</sup>くを見る。道榮大いに驚き喚めき、子喬覚め、道榮問ふ「向に夢を得るや不<sup>い</sup>や」と。子喬答へて曰く「夢みず」と。道榮為に其の見

る所を説けば、歓喜すること言ふべからず。自ら還た械を著け人をして知らしめず。四五日を得、遂に意に非ざりて放散せらる。義安太守太原の王琰、杲と旧有り、『冥祥記』を作る。其の族兄の璉子喬及び道榮を識り、二人の説くを聞けば、皆同じきこと此くの如しと道ふ。

右廿二条、『普門品』に云ふ「其の身を檢繫す」。

### 【訳】

彭子喬は、益陽（湖南省益陽県）の人だった。この郡の主簿となった。太守沈文竜に直言して逆らったため、捕まって投獄され、沈文竜は子喬を殺してしまおうと思った。子喬は若い頃出家してその後還俗したため、いつも『觀世音經』を唱えていた。当時文竜は、必ず子喬を思っており、子喬は他に希望が無いことがわかり、ただ一心に誦經した。百回余りに及ぶと、既に非常に疲れが限界に達し、急に真つ昼間に眠ってしまい、共に獄に繋がれていた十数人がいたが彼らもまた眠り横たわった。湘西県（湖南省株州南）の役人杜道榮という人がいて、この人もまた獄中におり、その時うつらうつらとしてきちんと熟睡できずにいた。そのため、意識がはつきりしない中で二羽の白い鶴が現れ子喬の屏風の上にとどまる

のを見た。すぐに片方の鶴が子喬のそばに降り、さらにその姿は人にそっくりで、顔かたちはこの上なく美しい。道榮は心の中でこれを不思議に思い、起きて子喬の方を見ると、その両足についていた一双の足枷が外れて脚の下にあり、足枷で腫れた痕は変わらず脚についていた。道榮は非常に驚いて叫び、子喬が目覚め、道榮が「たった今、夢をみたか」と質問すると、子喬は「見ていない」と答えたので、道榮が子喬に夢でみたことを話すと、子喬は歓喜のあまり何も言うことができなかった。子喬は自ら足枷をもとの状態に戻し付け、周りの人に気づかれないようにした。四五日が経って、思いかけず釈放された。義安郡（湖北省襄陽一帯）太守である太原（山西省太原市）の王琰は、杲と旧交があり、『冥祥記』を著した。王琰が言うには、その族兄の王璉は子喬と道榮を見知っており、二人の言うことを聞けば、その内容は二人とも同じでこのとおりであったそうだ。

以上二十二条の話は、觀世音菩薩『普門品』でいう「その身を檢繫する」ことについての応驗である。

### 【語注】

★ 彭子喬Ⅱ人名。詳細不詳。

★ 触辻Ⅱ直言して相手の気持ちに逆らうこと。『晋書』卷四十二唐彬伝「順從者謂爲見事、直言者謂之觸辻（順從なる者は事を見るを爲すと謂ひ、直言なる者は之を觸辻と謂ふ）」。

★ 沈文龍Ⅱ人名。詳細不詳。

★ 杜道榮Ⅱ人名。詳細不詳。

★ 集Ⅱとどまる。とまる。三国魏・曹植「棄婦詩」「有鳥飛來集、拊翼以悲鳴（鳥の飛び来たりて集まり、翼を拊して以て悲鳴す）」。

★ 或Ⅱ「或復如似人」の「或」は、さらに、かさねて、の意。癰Ⅱはれもの。

★ 王琰Ⅱ人名。『隋書』経籍志史部古史類に『宋春秋』二十卷梁吳興令王琰撰とあり、また史部雜伝類に『冥祥記』十卷王琰撰とある。その他正史には『南史』卷五十七范縝伝に太原王琰とみえるのみである。ここから名門太原王氏の一員であり、吳興令になったことはわかるものの、その他の情報は『冥祥記』序文にしるされた内容との話の情報がすべてである。王琰の生涯については、張季琳「王琰の生涯」（『竹田晃先生退官記念東アジア論集』汲古書院一九九一）がある。

★ 王璉Ⅱ人名。王琰の一族であり同一世代であることは確かだが、他に記録をみない。

★ 普門品Ⅱ〔3〕語注参照。

（中国文学専攻 学部三年 加藤薫）

### 【補説】

『法苑珠林』によると、この事件は齊の建国元年（四七九）に起こったという。

末尾の文章は、陸杲と『冥祥記』の著者王琰に直接つながりがあつたことを示す重要なものである。『法苑珠林』が引用する『冥祥記』も末尾は「琰族兄璉親識子喬及道榮。聞二人説皆同如此（琰の族兄璉親しく子喬及び道榮を識る。二人の説くを聞くに皆同に此くの如し）」と類似した情報を載せる。

『繫觀世音応驗記』と『冥祥記』には、多くの重複条がある。そのうちの一部は大きく文章がことなる。これは、片方が片方を写した、という関係ではなく、両者がそれぞれ同じような話を共有できるところにあり、それぞれに記録をしたことがうかがえる。小南一郎「六朝隋唐小説史の展開と仏教信仰」（福永光司編『中国中世の宗教と文化』京都大学人文科学研究所一九八二所収）及び佐野誠子「研究ノート―王琰『冥祥記』

と陸杲『繁観世音応驗記』(『和光大学表現学部紀要』一〇、二〇一〇)を参照。

(佐野誠子)

## 〔41〕

### 【本文】

益州<sup>〔1〕</sup>有一道人。從來山居。後忽遭賊、欲逃走。勢不得去、因還住坐、至心稱觀世音。賊向已見在屋裏、而入屋自迷或不見之。自相謂曰「此是神、必能殺我」。各競走去、道人得全<sup>〔2〕</sup>。

### 【参考資料】

\* 金剛寺本「佚名諸菩薩感應抄」(18)

### 【校注】

(1) 底本は答の異体字「荅」に作る。目録及び金剛寺本により改める。

(2) 底本は「令」に作る。文意により改める。なお、金剛寺本においては、この「道人得全」の四字そのものが脱落している。

### 【書き下し】

益州に一道人有り。從來山居す。後忽ち賊に遭ひ、逃走せんと欲す。勢ひ去るを得ず、因りて還りて住して坐し、至心に觀世音を称ふ。賊向に己に屋の裏に在るを見るも、屋に入るに自ら迷或して之を見ず。自ら相謂ひて曰く「此れは是れ神なり、必ず能く我を殺さん」と。各の競ひて走り去り、道人全きを得たり。

### 【訳】

益州(四川省成都県)に一人の道人がおり、今までずっと山に住んでいた。後になって、突然山賊に遭遇し、逃げ去ろうとした。ところが、その時の状況は逃げられるものではなく、それで道人は自分の家に戻ってとどまって座りこみ、真心を尽くして觀世音を称えたのである。山賊は觀世音を唱える前にすでに家の中に道人がいるのを見つけていたが、いざ入ると、目まいがしてくらくなり、家の中の道人を見ることができなくなった。山賊たちみずからがお互いに言った、「これは神さまだ、俺たちを殺してしまうぞ」と。山賊たちはそれぞれ先を争って走って逃げていき、道人は事なきを得たのである。

【語注】

★ 勢Ⅱ状況。なりゆき。

★ 迷惑Ⅱぼんやり。「或」は「惑」の古字。『後漢書』卷五十九張衡伝思玄賦「彼無合其何傷兮、患衆僞之冒眞。旦獲譴于羣弟兮、啓『金滕』而乃信。覽烝民之多僻兮、畏立辟以危身。曾煩毒以迷或兮、羌孰可與言己（彼合ふ無けれども其れ何ぞ傷れん、衆の之を偽りて眞を冒すを患ふ。〔周公〕旦羣弟に譴を獲るも、『金滕』を啓きて乃ち信ず。烝民の多く僻なるを覽ずるに、立辟して以て身を危ふくするを畏る。煩毒を會ねて以て迷或す、羌孰か与に己を言ふべけんや）」。

（中国文学専攻 学部三年 長谷川浩平）

〔42〕

【本文】

河北有老尼、薄有資材、爲賊所掠。尼既無他計、仰天絶喚觀世音。忽聞空中有「噫<sup>①</sup>」聲、響振遠近。群盜驚怖、一時散走。諸物皆得不失。

【參考資料】

★ 金剛寺本「佚名諸菩薩感應抄」（19）

【校注】

（1）底本は「億噫」に作る。「億」字右脇にミセケチがあること、また金剛寺本により「億」字を削除する。

【書き下し】

河北に老尼有り、薄かに資材有り、賊の掠める所と爲る。尼既に他計無く、天を仰ぎて絶して觀世音を喚ぶ。忽として空中に「噫」の声有るを聞き、遠近に響振す。群盜驚怖し、一時に散走す。諸物皆失はざるを得たり。

【訳】

河北（山西省芮県）に老いた尼がいた。わずかに財産を持っていたが、賊に奪い取られてしまった。尼はすでに何もすることできず、天を仰いで必死に觀世音を呼んだ。すると、ふつと空中から「噫」という音があり、あちらこちらに響き渡った。盜賊の群れは驚き恐れ、すぐさま散って逃げて行っ

た。尼のもろもろのものは、一つとして失われることがなかったのである。

(中国文学専攻 学部三年 長谷川浩平)

# 【語注】

★ 薄Ⅱわずか。少ない。『敦煌變文集・廬山遠公話』「賤奴身雖居下賤、佛法薄會些些、緇服不同、法應無二（賤奴身下賤に居ると雖も、仏法薄かに会すること些些なり、緇服同じからざれども、法は応に二無かるべし）」。

★ 掠Ⅱ強奪する。奪い取る。『後漢書』卷四十三朱穆伝「又掠奪百姓、皆託之尊府（又百姓より掠奪し、皆之を尊府に託す）」。

★ 絶Ⅱ精力をそそぐ。このような意味の「絶」は〔7〕に既出。

★ 噫Ⅱ応答するときの声。『一切経音義』に「噫噫、借音、於矜反。相答應聲也（借音なり、於矜の反。相答應するの声なり）」とある。

★ 響振Ⅱ音がふるえ伝わる。『高僧伝』卷十一支曇蘭伝「便聞鳴笳動吹響振山谷（便ち笳を鳴らし吹を動かして山谷に響振するを聞く）」。

★ 一時Ⅱすぐに。

# 〔43〕

## 【本文】

劉度、平原聊城人也。郷里千餘家並事佛、造立形像、供養衆僧。此縣嘗有逃叛。虜主木末大怒、盡欲殺一城。城中大懼、分見誅滅。度乃獎率衆人、共歸命觀世音。於是虜主忽見一物從天下繞其屋柱。驚起視之、乃『觀世音經』也。使人爲讀之、因大歡喜。恩省刑戮、一城無他。

## 【参考資料】

★ 『法苑珠林』卷十七所引『冥祥記』

★ 『太平広記』卷一百一十「劉度」出『冥祥記』

★ 『三宝感應要略録』卷下

◇ 『冥祥記』第五三話

## 【校注】

（1）底本は「遼」に作る。『太平広記』により改める。

（2）底本は「懸」に作る。『法苑珠林』等により改める。

(3) 底本は「本」に作る。『法苑珠林』等により改める。

(4) 底本は「經」字を欠く。『法苑珠林』等により補う。

### 【書き下し】

劉度は平原聊城の人なり。郷里の千餘家並びに仏に事へ、形像を造立し、衆僧を供養す。此の県嘗て逃叛有り。虜主木末大いに怒り、尽く一城を殺さんと欲す。城中大いに懼れ、誅滅せらるゝと分す。度乃ち衆人を奨率し、共に觀世音に歸命す。是に於いて虜主忽ち一物の天従り下りて其の屋柱に繞ふを見る。驚き起きて之を視るに、乃ち『觀世音經』なり。人をして之を読むを為さしめ、因りて大いに歡喜す。恩みて刑戮を省き、一城他無きなり。

### 【訳】

劉度は平原郡聊城県（山東省陽谷県）の人である。郷里の一千余りの家はみな仏に仕え、仏像を造つて建て、僧を供養していた。この県には以前逃亡者がいた。異民族の支配者であった木末はそれをひどく怒り、この県城の人々全てを殺そうとした。県城内の人々はひどく恐れ、罪に処されて殺され

るのだと思った。劉度はそこで人々を励まし率いて、一緒に觀世音に歸命した。そのようにしたところ、木末は、突然ある物が天から落ちてきて、家の柱に巻き付くを見た。驚き立ち上がってこれを見ると、『觀世音經』であった。人に『觀世音經』を読ませたところ、木末は大いに歡喜した。恩赦を実行して刑罰をとりやめ、この県城の人々は皆無事であった。

### 【語注】

★ 劉度Ⅱ人名。詳細不詳。

★ 木末Ⅱ人名。牧田書、董書は、西秦の第四代王、乞伏暮

末（在位四二八―四三二）のことではないかとするが、北

魏太宗明元帝、拓跋嗣の字が木末であり、こちらを指す

可能性が高い。補説参照。

★ 奨率Ⅱ励まして率いる。諸葛亮「出師表」（『三国志』卷

三十五諸葛亮伝所引）に「當奨率三軍、北定中原（当に

三軍を奨率して、北のかた中原を定むべし）」。

★ 分Ⅱ考える。

★ 歸命Ⅱ心から仏を信仰すること。（23）語注参照。

（中国文学専攻 修士二年 岩田麻愛）

## 【補説】

街全体が危機に陥るといふのは、「17」に類似する。

木末について、語注でも示したように、牧田書及び董書は、西秦の乞伏暮末のことではないかとしているが、西秦は、この話の舞台となっている平原聊城（山東省）にまで勢力範囲を広げたことはない。北魏太宗明元帝、拓跋嗣（在位四〇九—四二三）の字が木末であり（『宋書』索虜伝「安帝義熙五年、開次子齊王嗣、字木末、執清河王（安帝義熙五年（四〇九）、開（拓跋開、北魏太祖道武帝）の次子齊王嗣、字は木末、清河王を執る）」とある）、こちらを指していると考えられる。なぜなら、拓跋嗣の統治時代、山東省に攻め入った記述が残るからである。『魏書』卷三太宗本紀泰常七年（四二二）十二月の記事に、「遣壽光侯叔孫建等率衆自平原東渡、徇下青、兗諸郡。劉義符兗州刺史徐琰聞渡河、棄守走、叔孫建遂東入青州。司馬愛之、秀之先聚黨濟東、皆率衆來降（太宗）壽光侯叔孫建等をして衆を率ゐて平原自り東渡し、青、兗の諸郡を徇下せしむ。劉義符（劉宋を指す）の兗州刺史徐琰聞きて河を渡り、守を棄てて走り、叔孫建遂に東して青州に入る。司馬愛之、秀之先に党を聚めて東に降り、皆衆を率ゐて来たりて降る」とあり、南朝の王朝交代に乗じて攻め入っている。この

事件もこの頃のことではないだろうか。

ちなみに北魏太宗は、初代太祖に引き続き、法果を、道人統（僧統。詳しくは〔38〕参照）とし、仏教の振興に力を入れていた。そのため、本話のような奇跡が起きて喜んだということとは不思議ではない。ただ、その仏教信仰について、鎌田茂雄『中国仏教史』第三卷上（東京大学出版会一九八四）では、「しっかりと理解していたわけではないだろう」（二七三頁）とする。

（佐野誠子）

## 〔44〕

### 【本文】

釋慧標、長安人。十八出家、隨師在冀州遊學。值佛佛虜、後破州境<sup>1</sup>、百姓非死<sup>2</sup>。慧標怖急、唯歸念觀世音、以血塗身、臥死下。見有一小兒、倚在其邊<sup>3</sup>。語道「汝但至心、我當相助」。虜主疑屍下有生人、使吏亂加斫刺<sup>4</sup>。慧標身每觸刃<sup>5</sup>、終不見傷。虜去即失小兒所在。云「急以得免」。『宣驗記』又載會普賢亦入屍下得活。臬謂事不及此、故不取。

【参考資料】

\* 『弁正論』 卷七注所引『宣驗記』（補説参照）

【校注】

- （1）底本は「憶」に作る。『弁正論』及び文意により改める。
- （2）底本は「性」に作る。文意により改める。
- （3）底本は「飛」に作る。文意により改める。古字において両字は通じる。
- （4）底本は「研」に作る。文意により改める。
- （5）底本は「丑」に作る。文意により改める。

【書き下し】

釈慧標は、長安の人なり。十八にして出家し、師に随ひ冀州に在りて遊学す。仏々虜に値り、後に州境を破り、百姓非死す。慧標急を怖れて、唯だ觀世音を帰念し、血を以て身に塗り、死下に臥す。見るに一小児の有りて、其の辺に倚在す。語りて道ふに「汝但だ至心すれば、我当に相ひ助けんとす」と。虜主屍下に生人有るを疑ひて、更に乱れ加へて斫刺せしむ。慧標の身刃に触るる毎に、終に傷つけられず。虜去り

て即ち小児の在る所を失ふ。云ふ「急あるも以て免るを得たり」と。『宣驗記』も又た普賢に会ひて亦た屍下に入るのみにして活くるを得るを載す。果謂へらく事此れに及ばず、故に取らず。

【訳】

釈慧標は長安の人である。十八歳で出家して、師につき従つて冀州にいて学問をしていた。ちょうど仏仏虜がいた時であり、後に仏仏虜は冀州を攻め落とし、その地域の民衆は非業の死をとげた。釈慧標はこの危険な非常事態を恐れて、ただだ觀世音を心から思念し、血を自分の身体に塗り死体の下に横たわった。ふと見ると、一人のこどもがいて、すぐ近くに立っていた。こどもが釈慧標に告げて言うことには、「あなたが、ひたすら真心を尽せば、あなたに救いの手をさしのべましょう」と。虜主は死体の下にまだ生きている人がいるのではないかと怪しんで、死体をさらにかき乱し、切り刻ませた。釈慧標の身体は何度刃に触れても、とうとう傷を負わなかった。仏仏虜が立ち去って、すぐにこどもの居場所はわからなくなってしまうた。

このような話を「危険な事態にあつても脱出できた話」と

いう。『宣驗記』はまた、普賢菩薩にめぐりあつて、死体の下に入り込んだだけで生きながらえることができたという話を載せている。陸杲が思うには、『宣驗記』にみえる話はこの釈慧標の話には及ばないと考えたため、ここにはとらなかつた。

### 【語注】

＊ 釋慧標Ⅱ人名。詳細不詳。

＊ 冀州Ⅱ劉宋が濟南郡（山東省濟南市）に冀州を置いてい  
るが、釈慧標は長安（陝西省）出身であり、また赫連勃  
勃の後秦も長安付近を中心にした国家で、山東省の方に  
まで攻め入つたという記録はなく、この地名は不審。

＊ 佛々虜Ⅱ五胡・夏の王、赫連勃勃の一称。南朝では仏仏  
という。ここでは、北方の異民族に対する蔑称を含めて  
「虜」を用いているか。仏仏は、長安にいて攻められるも、  
後に諸將軍を捕虜にして、関中で自ら天子を名乗つたこ  
とが、以下のようにある。今回の話は、この史実と関わ  
りがあるのだろうか。『宋書』卷九十五索虜伝「赫連氏有  
名衛臣者、種落在朔方塞外、部落千餘戸。（中略）衛臣死、  
子佛佛驍猛有謀算、遠近雜種皆附之。姚興與相抗、興覆  
軍喪衆、前後非一、關中爲之傷殘。高祖入長安、佛佛震

懾不敢動。高祖東還、即入寇北地。安西將軍義真之歸也、  
佛佛遣子昌破之青泥、俘囚諸將帥、遂有關中、自稱尊號、  
號年曰真興元年。（中略）元嘉二年、佛佛死（赫連氏に名  
を衛臣といふ者有り、種落朔方之塞外に在りて、部落千  
餘戸あり。（中略）衛臣死して、子の仏仏驍猛にして謀  
算有り、遠近雜種皆之に附す。姚興与に相抗ひ、「姚」興  
軍を覆へし衆を喪ふこと、前後一に非ずして、関中之が  
爲に傷殘す。高祖長安に入るも、仏仏震懾して敢て動  
かず。高祖東還し、即ち北地に入寇す。安西將軍〔劉〕  
義真の歸するや、仏仏子の〔赫連〕昌を遣りて之を青泥  
に破らしめ、諸將帥を俘囚にし、遂に関中に有りて、自ら  
尊号を称し、年を号して真興元年（四一九）と曰ふ。（中  
略）元嘉二年（四二五）、仏仏死す」。

＊ 非死Ⅱ「非」には、正しくない、誤つたさまの意がある。  
董書は非業の死と注釈する。

＊ 急Ⅱ危険な事態。

＊ 死Ⅱ「屍」に通じる。死体。

＊ 倚在Ⅱ立っている。「在」の意味はあまり強くないと思わ  
れる。『世說新語』險畬「郗公大聚斂、有錢數千萬。嘉賓  
意甚不同。常朝旦問訊、郗家法子弟不坐。因倚語移時、遂

及財貨事（郗公大いに聚斂して、錢數千万有り。「郗」嘉賓の意甚だ同じからず。常て朝旦に問訊するに、郗家の法子弟坐せず。因りて倚語して時を移し、遂に財貨の事に及ぶ）。

★ 斫刺<sup>セツサツ</sup>〓切り殺す。『後漢書』卷五十八臧洪伝「呂奉先討卓來奔、請兵不獲、告去何罪、復見斫刺（呂奉先に「董」卓を討ちて来たり奔し、兵に請ふも獲ず、告ぐるに何の罪を去る、復た斫刺せらる）」。

★ 亦<sup>モトモト</sup>ただくなだけである。行為や事情が、ある範囲に限られることを表す。

★ 『宣驗記』〓劉義慶による仏教志怪。劉義慶については「6」語注参照。現在残る佚文に陸杲という普賢菩薩がでてくる話は見当たらない。また、この話と同時期の事件とみられる話が、『宣驗記』佚文にある。補説参照。

### 【補説】

本文中の「云急以得免」は、今回「（このような話を）『危険な事態にあつても脱出できた話』という」と訳した。しかし、もう一つ別の訳も考えられる。ここはもしかすると、ごどの姿は見えなくなったが、「急以得免（急すれば以て免るる

を得<sup>ユ</sup>〓急げば逃げることができるぞ）」とごどもが言ったのが聞こえてきたという場面かもしれない。つまり、「云急以得免」まで話が續いていて、『宣驗記』以降が話のまとめとなっている可能性もあるということである。どちらとも決めがたいが、今回は「云」〓「人のことばや、古書の引用や、伝聞を示す」の意味から「伝聞」でとり訳した。そうすると、『普門品』などのどこかに「急以得免」という題目があったとも考えられるが、目下のところ該当する記述をみつけれない。

（中国文学専攻 修士一年 林美江）

『弁正論』卷七の「赫連兇頑。被像衣而震死」の注に『宣驗記』云として、以下の文を引用する。

「佛佛虜破冀州境内。道俗咸被殲戮兇虐暴亂、殘殺無厭、爰及關中、死者過半。婦女嬰稚積骸成山。縱其害心以爲快樂。仍自言曰。佛佛是人中之佛。堪受禮拜。便畫作佛像。背上佩之當殿而坐。令國內沙門向背禮像。即爲拜我。後因出遊。風雨暴至四面暗塞。不知所歸。雷電震吼霹靂而死。既葬之後就塚霹靂。其棺烈屍出外題背爲兇虐無道等字。國人慶快嫌其死晚。少時爲案頭主沙主所吞妻子被刑戮（仏仏虜冀州境内を破る。道俗咸な殲戮兇虐暴亂され、殘殺するに厭ふ無く、爰に関中に及び、死者半を過ぐ。婦女嬰稚骸を積みて山と成る。

縦に其れ害し、心以て快樂と為す。仍ほ自ら言ひて曰く。

仏仏は人の中の仏なり。礼拝を受くに堪ふ、と。便ち画きて仏像を作る。背上に之を佩びて殿に当たりて坐す。国内の沙門をして背を向けて像に礼せしむるは、即ち我を拜すと為すと。後に困りて出遊す。風雨暴なりて四面暗塞に至る。帰る所を知らず。雷電震吼霹靂して死せり。既に之を葬りて後就ち塚霹靂す。其の棺の烈屍外に出で背に題して兇虐無道等の字を為す。国人慶快し其の死することの晩きを嫌ふ。少時索頭主の沙圭の呑む所の妻子刑戮せらるる」

この話は、本話と同じときの事件を扱っているようだが、陸杲のいう普賢菩薩云々という話ではない。また、『弁正論』では、この引用文の末尾に蕭子顯の『南齊書』とあるが、蕭子顯『南齊書』にこの話はない。彦悰『集沙門不応拝俗等事』、『大藏經』史伝部五二巻）は、この話とほぼ同内容に言及して、赫連勃勃が、五刑の虐を行ったとする。鎌田茂雄『中国仏教史』第三巻では、この赫連勃勃の暴虐により、長安の仏教徒が大挙して寿春にのがれ、さらに建康に行き、南朝の仏教の隆盛に貢献したことを述べる（一一〇頁）。

（佐野誠子）

〔45〕

【本文】

欒苟亦事佛、嘗作富平令。先征廬循、小失利、舫被火燒。賊又見逼、正在江漲、風浪大起、苟自分必死、猶念觀世音。須臾、見一人倚江中央、水裁至腰。苟知是神人、即投水就之、體自不沒、脚如踰地。大軍遣船迎敗者、又即先與相逢。苟本肥重、力不舉體。得更見四人捧其入船、既入熟視、定都無人。

【參考資料】

- \* 『法苑珠林』卷十七所引『冥祥記』
- \* 『太平広記』卷一百一十「欒苟」出『冥祥記』
- ◇ 『冥祥記』第一四二話

【校注】

- (1) 底本は「虜脩」に作る。『法苑珠林』等により改める。
- (2) 底本は「江漲」に作る。『法苑珠林』『太平広記』は「中江」に作る。漲は、存在しない文字のため、文意により改める。

- (3) 底本は「火」に作る。『法苑珠林』『太平広記』は「風浪駭目」に作る。文意により改める。

(4) 底本は「急」に作る。『法苑珠林』等により改める。

(5) 底本は「失」に作る。文意により改める。

(6) 底本は「軍」字を欠く。『法苑珠林』等により補う。

(7) 底本は「與」に作る。文意により改める。

### 【書き下し】

欒苟も亦た仏に事へ、嘗て富平の令と作る。先に盧循を征つに、小利を失ひ、舫火に焼かる。賊に又た逼られ、正に江漲に在り、風浪大いに起る。苟自ら必らず死すと分し、猶ほ觀世音を念ず。須臾にして、一人の江の中央に倚り、水裁かに腰に至るを見る。苟是れ神人なるを知り、即ち水に投じて之に就き、体自ら没せず、脚地を踏むが如し。大軍船をして敗るる者を迎へしめ、又た即ち先んじて与に相逢ふ。苟本より肥え重く、力むれども体を挙げず。更に四人に捧げられ其の船に入るを得、既に入り熟視すれども、定たして都て人無し。

### 【訳】

欒苟もまた仏に奉仕し、嘗て富平県（陝西省長安）の長官となった。以前盧循を征討する際に、やや形勢不利となり、船

は火に焼かれた。敵軍にさらに迫られて、ちょうどそのとき河の広い所におり、風と波が激しく起こった。苟は必ずや死ぬことがわかって、それでもなお觀世音を念じた。ほどなく、ひとりの人が河の中央に立っていて、水面はわずかに腰に達するだけなのを見た。苟はこの人が神人であるとわかり、ただちに飛び込んで神人のほうへ近づくと、身体は自然と沈まず、脚は地面を踏んでいるかのようにあった。味方の大部隊は船を送って敗れた兵を助けに行かせており、苟は再びすぐに前進し彼らと出会った。苟はもともと体が肥っていて重たく、力を尽くしても身体を持ち上げられなかったが、再び四人のものに支えられ味方の船に乗ることができた。船に乗り終えてから注意してよく見たが、なんとその四人の誰も見当たらなかった。

### 【語注】

★ 欒苟Ⅱ人名。詳細不詳。『冥祥記』は「欒苟」に作る。欒苟、欒苟とも他に記録がないため、どちらとも決めかねる。

★ 盧循Ⅱ晋の人。諡の曾孫。字は于先。草書、隸書、奕棋などに巧み。孫恩の妹を娶り、恩の死後衆に推されて盟主となり、たびたび晋に侵攻したが劉裕に撃退されて死

去。この事件は元興二年（四〇三）正月のことか。『晋書』卷一百に伝あり。また牧田書参照。

★ 漲（う）大きな河。『広韻』及び『集韻』に「漲、大水也」とある。大水とは、大きな海、河、湖のことをいう。この

「正在江漲」の部分で、『法苑珠林』及び『太平広記』は「正在中江」に作る。「8」には「半漲」の語がみえる。

★ 定（じやう）なんと。意外なことをあらわす副詞。『世説新語』任誕「初云當留婢、既發、定將去（初め云ふ當に婢を留むべし、既に発するや、定（じやう）たして將（ひき）る去る）」。

（中国文学専攻 学部三年 加藤薫）

## 〔46〕

### 【本文】

道人釋開達、以晉隆安二年北上壘、掘甘草。<sup>(1)</sup>時羌中大饑、皆捕生口食之。開達爲羌所得、閉置柵裏。以擇食等伴肥者、次當見及。開達本諳『觀世音經』。既急、一心歸命、恒潛誦誦、日夜不息。<sup>(3)</sup>羌食柵人漸欲就盡、唯餘開達與一小兒、以擬明日當食之。開達急、夜誦經、係心特苦、垂欲成曉。<sup>(4)</sup>羌來取之。開達臨急愈至、猶望一感。<sup>(5)</sup>忽然見有大虎從草趨出、跳距大叫、<sup>(6)</sup>

諸羌一時怖走。虎因柵作一小穿、足得通人、便去。開達仍將小兒走出、逃叛得免。

### 【參考資料】

- ★ 金剛寺本「佚名諸菩薩觀心抄」（26）
- ★ 『法苑珠林』卷十七所引『冥祥記』
- ★ 『觀音義疏』卷上出『応驗伝』
- ★ 『法華伝記』卷六
- ★ 『太平広記』卷一百一十「釋開達」出『法苑珠林』
- ◇ 『冥祥記』第四七話

### 【校注】

- (1) 底本は「掘」に作る。文意により改める。
- (2) 底本は「差」に作る。文意により改める。以下同。
- (3) 底本は「着」に作る。文意により改める。
- (4) 底本は「持」に作る。文意により改める。
- (5) 底本は「急」に作る。文意により改める。
- (6) 底本は「距」に作る。文意により「距」に改める。

## 【書き下し】

道人釈開達、晋の隆安二年を以て北して壘に上り、甘草を掘る。時に羌中大いに餓え、皆生口を捕へて之を食らふ。開達羌の得る所と爲り、柵の裏に閉置せらる。等伴の肥ゆる者を撰食するを以て、次当に及ばんとするを見る。開達本より『觀世音經』を誦んず。既に急なりて、一心に歸命し、恒に潜かに誦誦すること、日夜息まず。羌柵人を食らふこと漸く就ち尽きんと欲し、唯だ開達と一小兒を餘すのみ、以て明日當に之を食らふべしと擬す。開達急にして、夜經を誦じ、心を係くること特に苦なり。曉に成らんと欲して垂とすると、羌来たりて之を取らんとす。開達急に臨みて愈よ至り、猶ほ一感を望む。忽然として大虎の草従り越り出づる有るを見、跳距して大いに叫び、諸羌一時に怖れ走る。虎因りて柵に一小穿を作り、人を通すを得るに足り、便ち去る。開達仍りて小兒を將ゐて走り出で、逃叛して免るを得たり。

## 【訳】

道人の釈開達は、晋の隆安二年（三九八）、北に行き、高い丘に登って甘草を掘っていた。その当時、北方の異民族である羌の中で大飢饉があり、みな捕虜を捕まえてはこれを食べ

ていた。開達たちも羌に捕まってしまい、柵の中に閉じ込められた。羌が開達の仲間たちのうち太った者を選んで食べており、順番がまさに回ってこようとしていた。開達はもともと『觀世音經』を誦んずることができた。状況はすでに差し迫っており、心を一つにして歸命し、常にひそかに經を誦んじることが、昼も夜も止むことがなかった。羌が柵の中の人を食べ続け、次第に食べ尽くされようとしていた。ただ開達と一人のこどもが残されただけであつた。そこで羌は、明日この二人を食べようと決めた。開達は焦って、夜に經を唱えて、心をかけて唱えることは特に懇切であつた。まもなく夜が明けようとするとき、羌がやってきて二人を連れだそうとした。開達は急事に臨むにあたつていよいよ心を尽くして唱え、それでもなお菩薩が靈驗を表すことを待ち望んでいた。その時、ふと草むらの中から一匹の大きな虎が飛び出てくるのを見、躍りかかって大いに叫び、羌たちはみな恐れて一度に逃げて行つた。虎が柵に人が通るのに充分な大きさの穴をつくってくれ、虎は去って行つた。そこで開達は一人のこどもを連れて走って脱出した。こうして、逃げびることができたのである。

【語注】

★ 釋開達Ⅱ僧侶の名。詳細不詳。『法苑珠林』では「晋の沙門」としている。なお、『法華伝記』では「釋慧達」、『観音義疏』では「慧達」、『佚名諸菩薩感應抄』では「尺開達」に作る。

★ 壘Ⅱ隴に通じ、これは現在の甘肅省の略称である。ただしここでは特別な地名を指しているのではなく、『法苑珠林』などが「登壘採甘草」と書いていることから、おそらく「高丘」の意であろう。

★ 羌Ⅱえびすの一。西方の蛮族の称。もと三苗の子孫。舜の時、三危に流された。後漢の時、東西に分かれ、晋の時、五胡の一となった。後秦を作った。チベット族。

★ 生口Ⅱ捕虜。『漢書』卷五十二韓安国伝「安国爲材官將軍、屯漁陽、捕生口虜、言匈奴遠去（韓）安国材官將軍と爲り、漁陽に屯し、生口の虜を捕へ、匈奴遠くに去れりと言ふ」。

★ 等伴Ⅱなにかま。

★ 擬Ⅱくするつもりである。くしようとする。（28）語注も参照。『世説新語』賞誉「蕭中郎、孫丞相婦父。劉尹在撫軍坐、時擬爲太常。劉尹云『蕭祖周不知便可作三公不。

自此以還、無所不堪』（蕭中郎は、孫丞相の婦の父なり。劉尹撫軍の坐に在り、時に太常に為さんと擬す。劉尹云ふ『蕭祖周は便ち三公と作すべきや不やを知らず。此れ自り以還は、堪へざる所無し』と）。

★ 係心Ⅱ心をかける。心をよせる。たのみとする。

★ 苦Ⅱねんごろ。懇到。『世説新語』規箴「執經登坐、諷諄朗暢、詞色甚苦。高足之徒、皆肅然增敬（經を執りて坐到に登り、諷諄は朗暢として、詞色甚だ苦なり。高足の徒、皆肅然として敬を増す）」。

★ 透Ⅱ「透」に同じ。『集韻』には、「透、透、他候切。説文、跳也、過也、或從走（透、透なり、他候の切。説文、跳なり、過なり、或いは走に従ふ）。「透」字には、おどる、すぎる、こえるの意がある。

★ 距Ⅱおどりがあがる。飛び越える。『楚辭』九思・遭厄「將升兮高山、上有兮猴猿。欲入兮深谷、下有兮虺蛇。左見兮鳴鵙、右睹兮呼臬。惶悸兮失氣、踊躍兮距跳（將に高山に升らんとするも、上に猴猿有り。深谷に入らんと欲するも、下に虺蛇有り。左に鳴鵙を見、右に呼臬を睹る。惶悸して氣を失ひ、踊躍して距跳す）」。

★ 穿Ⅱ洞。穴。あな。『宋書』卷八十一劉秀之伝「廳事柱有

一穿、穆之謂子弟及秀之曰『汝等試以栗遙擲此柱、若能入穿、後必得此郡』。穆之諸子並不能中、唯秀之獨入焉（序事の柱に一穿有り、穆之子弟及び秀之に謂ひて曰く『汝等試みに栗を以て遙かに此の柱に擲ち、若し能く穿に入るれば、後必ず此の郡を得せしめん』と。穆之の諸子並びに中つる能はず、唯秀之のみ独り入る）。」  
\* 仍〓そこで。よつて。

（中国文学専攻 学部三年 長谷川浩平）

## 〔47〕

### 【本文】

裴安起<sup>(1)</sup>河東人也。從虜中叛歸、至河邊、不得過。望見追騎<sup>(2)</sup>在後。便死在須臾、於是喚觀世音。始得數聲、仍見一白狼從草中出。仰視安起、回還繞之。安起目不暇視、狼還入草。斯須追至、安起心悟、復喚狼、「若是觀世音、更來救我」。道此未竟、應聲即出。安起跳往抱之、狼一擲便過南岸。集止之間、奄失狼所在。追騎共在北岸、望之嘆惋無極。宋孝建初、劉瑀<sup>(7)</sup>作益州、爾時、安起爲成都縣掾起一塔<sup>(8)</sup>。既嘗荷神力、殊大精

進。蔣山上定林寺阿練道人釋道僊<sup>(9)</sup>、在蜀識裴、恒聞其自序此事、爲臯具說。安起即齊州刺史裴叔業父也。

### 【參考資料】

\* 金剛寺本『佚名諸菩薩感應抄』（27）

\* 『觀音義疏』卷上引『感應伝』

### 【校注】

- （1）底本は「裴」に作る。金剛寺本等により改める。以下同。
- （2）「便」字は脇から挿入されている。
- （3）底本は「佈」に作る。金剛寺本により改める。
- （4）底本は「忘」に作る。金剛寺本による改める。
- （5）底本は「琬」に作る。金剛寺本等により改める。
- （6）底本は「宗」に作る。史実により改める。
- （7）底本は「璃」に作る。史実により改める。
- （8）底本は「増」に作る。文意により改める。
- （9）底本は「尺」に作る。「釋」を略して書いたもの。

### 【書き下し】

裴安起は河東の人なり。虜中從り叛きて歸し、河辺に至るも、過ぐるを得ず。望みて追騎後に在るを見る。便ち死須臾

に在り、是に於て觀世音を喚ぶ。始め数聲を得て、仍りて一白狼の草中従り出づるを見、安起を仰視し、回還して之を繞る。安起目するも視る暇あらず、狼還りて草に入る。斯須にして追至り、安起心悟し、復た狼を喚ぶに「若し是れ觀世音ならば、更めて来たりて我を救へ」と。此を道ふこと未だ竟へずして、声に応へて即ち出づ。安起跳び往きて之に抱き、狼一たび擲ちて便ち南岸を過ぐ。集止の間、奄ち狼の所在を失ふ。追騎共に北岸に在るも、之を望みて嘆惋すること極まり無し。宋の孝建の初め、劉瑀益州と作り、爾の時、安起成都県界に一塔を起つるを為す。既に嘗て神力を荷け、殊に大いに精進す。蒋山の上定林寺の阿練道人釈道仙、蜀に在りて裴を識り、恒に其の自ら此の事を序するを聞き、杲の為に具さに説く。安起は即ち齊州刺史裴叔業の父なり。

### 【訳】

裴安起は河東郡（山西省）の人である。異民族から逃げ戻り、河のほとりに着いたが、渡ることができなかった。遠くを眺めて追手の騎兵が後ろに迫っているのを見た。死がすぐそこに迫っており、そこで觀世音を叫んだ。最初に数聲を発し、そうしたところ一匹の白狼が草の中から出てきて、安起を

仰ぎ見て、行ったり来たりして彼をとりまいた。安起は狼を目でとらえるも見ろ暇がなく、狼は引き返して草の中に入った。すぐに追手がやってきて、安起は心に悟り、再び狼を呼んで「もし觀世音ならば、改めてやって来て私を救ってくれ」と言った。これがまだ言い終わらないうちに、声にこたえてすぐに狼が出てきた。安起は跳びはねて狼に抱きつく、狼は一けり躍り上がってすぐに南岸に渡った。降りた瞬間、急に狼がいなくなった。追手の騎兵は共に北岸にいたが、これを見て嘆き悔やむことが尽きなかった。宋の孝建年間（四五四―四六四）のはじめ、劉瑀が益州（四川省成都県）を治めていた頃、安起は成都県の県境の地域に一つの塔を建てた。既にかつて不思議な力を身に受けたため、とりわけ非常に尽力した。鍾山（江蘇省江寧県）の上定林寺の修行僧である釈道仙は、蜀にいて裴安起と知り合い、いつも彼自身がこの事を述べるのを聞き、陸杲のために詳しく語ってくれた。裴安起は齊州刺史である裴叔業の父である。

### 【語注】

★ 裴安起Ⅱ人名。本文では裴叔業の父とされているが、詳細不詳。『魏書』卷七十一、『北史』卷四十五の裴叔業伝

には、「父順宗」としるされており、本当に裴叔業の父であつたのかも不明。

★ 斯須Ⅱ「須臾」に同じ。『礼記』祭義「禮樂不可斯須去身（礼樂は斯須も身を去るべからず）」鄭玄注「斯須、猶須臾也（斯須は、猶ほ須臾のごときなり）」。

★ 擲Ⅱ跳び上がる、おどろあがる。『世說新語』仮譎「紹遠迫自擲出、遂以俱免（紹は違迫して自ら擲出し、遂に以て俱に免る）」。

★ 集Ⅱ（雨などが）降る。『淮南子』説山訓「雨之集、無能霑（雨の集まるや、能く霑らすこと無し）」。

★ 奄Ⅱ突然に。

★ 嘆惋Ⅱ驚き嘆くこと。陶淵明「桃花源記」「此人一一爲具言所聞、皆歎惋（此の人一一爲に具さに聞く所を言ひ、皆歎惋す）」。

★ 宋孝建Ⅱ孝武帝の在位は、孝建年間（四五四―四五六）と大明年間（四五七―四六四）である。しかし、劉瑀が益州刺史に再度任命されたのは孝建三年（四五六）のことであり、「孝建初」という本文の記述とやや異なる。「宋孝武初」とすべきところを、皇帝の名と年隨衆口号の称が混ざり、誤って「宋孝建初」としるされた可能性があ

ると考えられる。

★ 劉瑀Ⅱ人名。字は茂琳。『宋書』卷四十二に伝あり。伝によれば、元嘉二十九年（四五二）と孝建三年（四五六）に益州刺史となっている。

★ 堺Ⅱ「地域の境界」を指す。『南齊書』卷五十一裴叔業伝「北人不樂遠行、唯樂侵伐虜堺（北人は遠行を樂します、唯だ虜堺を侵伐するを樂しむのみ）」。

★ 荷Ⅱ恩恵などをこうむる。曹操「請爵荀彧表」（『全三國文』卷一、袁宏『後漢紀』卷二十九所引部分）に「而臣前後、獨荷異寵、心所不安（而して臣の前後にして、獨り異寵を荷けるのみなるは、心の安んぜざる所なり）」。

★ 蔣山Ⅱ鍾山。建康にある山の名。現在の紫金山。

★ 上定林寺Ⅱ寺院の称。『高僧伝』卷三曇摩蜜多伝に上定林寺造営の経緯がしるされている。

★ 阿練道人Ⅱ阿練は〔31〕語注にしめたように、僧侶に対する親しみを込めた呼び方。阿練道人の語は、他に用例をみない。阿練若と阿蘭若は通じるため、阿蘭若行（人里離れたところに止住する）にはげむ僧侶の意か。

★ 道僊Ⅱ僧侶の名。〔53〕に道汪の弟子として名が出てくる。その他の書にはみられず、詳細不詳。

★ 序述べる。「叙」に通じる。『三国志』卷四十八孫休伝

「布得詔陳謝、重自序述、又言懼妨政事（〔呂〕布詔を得て陳謝し、重ねて自ら序述し、又た政事を妨ぐるを懼ると言ふ）」。

★ 裴叔業Ⅱ人名。後魏、聞喜（山西省絳県）の人。諡は忠武。『南齊書』卷五十一、『魏書』卷七十一、『北史』卷四十五に伝あり。南齊に仕え、黃門侍郎、徐州刺史を歴任した後に豫州刺史となるが、「齊州刺史」になったという記録は見当たらない。

（中国文学専攻 修士二年 岩田麻愛）

## 〔48〕

### 【本文】

毛女、秦郡人也。少即出家。有姚氏、娉之不許。氏大怒欲殺之、便結十餘伴、劫娶去。縣遣監司追討、不知所在。女既被執、唯念觀世音。心誓。若得脫者、即便入道。作此念已、忽然山頭有小火光。追者疑異、即往圍之、姚氏伴悉得走、唯捉得姚氏還、依法。女即出家精進。

### 【參考資料】

★ なし。

### 【校注】

- （1）底本は「造」に作る。文意により改める。  
（2）「知」字、脇から挿入されている。  
（3）「火」字、脇から挿入されている。

### 【書き下し】

毛女は、秦郡の人なり。少くして即ち出家す。姚氏有り、之を娉めとらんとするも許されず。氏大いに怒りて之を殺さんと欲し、便ち十餘伴を結び、劫おびやかして娶り去る。県は監司を遣はして追討せしむれども、所在を知らず。女既に執はれ、唯だ觀世音を念ず。心に誓ふ。若し脱するを得れば、即便すなはち道に入らん、と。此れを作なして念じ已めば、忽然として山頭に小さき火光有り。追ふ者異なるを疑ひ、即ち往きて之を囲む。姚氏の伴悉く走るを得、唯だ捉するに姚氏を得て還り、法に依らしむ。女即ち出家し精進す。

【訳】

毛姓の女子は、秦郡（陝西省）の人である。幼い頃すぐに出家をした。当時、姚氏という人がこの女子を妻にむかえようとしたが、聞き入れられなかった。姚氏は大変怒ってこの女子を殺そうと思い、十人餘りの仲間を集めて女を脅迫し、自分の妻にして逃げ去った。県は監司を送って後を追わせたが、行方がわからなかった。女子は捕らわれてからただただ観世音を念じていた。心の中で、「もし逃れることができたなら、すぐに出家しましょう」と誓い、念じ終わると、突然捕らわれていた山の頂上に小さい火の光が現れた。追っ手は不思議に思い、そこに向かいこれを包囲した。姚氏の仲間はみな逃れたが、姚氏だけを捕まえて帰り、法に従って処罰した。女はすぐに出家して仏道に精進した。

【語注】

- ★ 毛女Ⅱ毛家の女子。詳細不詳。
- ★ 監司Ⅱ監督の責務を負う役人。〔30〕語注参照。
- ★ 提Ⅱ罪人を捕まえること。

（中国文学専攻 学部三年 加藤薫）

〔49〕

【本文】

張崇、京兆杜陵人也。本信佛法。晉太元中、苻堅敗時、關中人千餘家歸晉。中路爲方鎮所録、盡殺虜女。崇與五伴並械手脚、埋地沒腰、相去各廿步。明日欲走馬射之。崇無後計、唯歸念觀世音。中夜械忽自破、身得出土。因此便走、遂以得免。崇深痛諸存亡遭此無道。乃喚觀世音、又禮十方佛。以一、大石置前、致願曰「我今欲過江、訴晉帝、理此怨魂及其妻息、若心願獲果、此石當破爲二」。行旋一匝、石即成兩。崇遂至江東、發白虎樽具列冤狀。孝武即勅、凡歸晉人被略賣者、皆得爲民。智生道人目所親見。

【参考資料】

- ★ 『法苑珠林』卷六十五所引『冥祥記』
- ★ 『太平広記』卷一百一十「張崇」出『法苑珠林』
- ◇ 『冥祥記』第四二話

【校注】

- （1）底本は「別」に作る。『法苑珠林』等により改める。

(2) 底本は「陵」字を欠く。『法苑珠林』等により補う。

(3) 底本は「開中」に作る。『法苑珠林』と『太平広記』に「長安」とあることにより改める。

(4) 底本は「腕」に作る。『法苑珠林』等により改める。

(5) 底本は「出」に作る。「歩」のくずし字に類似しているため改める。

(6) 底本は「故」に作る。『法苑珠林』等により改める。

(7) 底本は「即」に作る。『法苑珠林』等により改める。以下同。

(8) 底本は「誰」に作る。『法苑珠林』等により改める。

(9) 底本は「愬」に作る。文意により改める。『法苑珠林』と

『太平広記』は「冤魂」に作る。

(10) 底本は「自」に作る。『法苑珠林』等により改める。

(11) 底本は「故」に作る。『法苑珠林』等により改める。

### 【書き下し】

張崇は、京兆杜陵の人なり。本より仏法を信す。晋の太元中苻堅の敗るる時、関中の人千餘家晋に帰せんとす。中路方鎮の録する所と為り、尽く殺され女を虜にさる。崇と五伴と並びに手脚に械され、地に埋めらるること腰を没し、相ひ去

ること各の廿歩。明日馬を走らせ之を射んと欲す。崇後計無く唯だ觀世音を帰念するのみ。中夜械忽ち自ら破れ、身土より出づるを得。此れに因りて便ち走り、遂に以て免るるを得。崇深く諸の存亡此の無道に遭ふを痛む。乃ち觀世音を喚び、又た十方仏に礼す。一大石を以て前に置き、願を致して曰く「我今江を過り、晋帝に訴へ、此の怨魂及び其の妻息を理めんと欲す。若し心願して果を獲れば、此の石当に破れて二と為るべし」と。行旋して一たび匣<sup>め</sup>れば、石即ち兩と成る。崇遂に江東に至り、白虎樽を瓮きて具さに冤状を列す。孝武即ち勅し、凡そ晋に帰する人の略売せらるる者、皆民と為るを得たり。智生道人の目に親見する所なり。

### 【訳】

張崇は、京兆杜陵（陝西省長安県）の人である。もともと仏の道を信じていた。晋の太元年間（三七六―三九六）に、苻堅が敗れた時、関中（陝西省）の千余りの家の人々は晋王朝に帰属しようとした。途中で軍事長官に捕らえられ、みな男は殺され女は捕虜にされた。張崇と五人の仲間と共に手足に枷をはめられ、地面に埋められるのは腰をうずめるほどで、彼らはそれぞれ二十歩（およそ二メートル）ずつ互いに離れて

いた。翌日に馬を走らせて彼らを射ようとしていた。張崇はこの後の策はなく、ただただ観世音を心から思念した。真夜中に枷が突然壊れ、身体も地中から出ることができた。それで張崇はすぐに逃げて、そのまま抜け出すことができた。張崇は多くの生者・死者がこんなひどい事に遭遇したのを甚だ悲しみなげいた。そこで観世音の名を唱え、さらに十方の諸仏にも礼拝した。そこで一つの大きな石を目の前に置き、誓願を述べて張崇が言うことには「私は今長江を渡って、晋の孝武帝に訴え、彼らの怨みの残る魂のことや、彼らの妻・子どものことを申し上げたいのです。もしこのような願をたてて報いを得ることができるのなら、この石は二つに割れるでしょう」と。ぐるりと石の周りを一周すると、石はすぐに割れて二つになった。張崇はそれで江東（江蘇省建康）に到着し、白虎樽を開けて詳しく無実の罪の実情を述べた。孝武帝がすぐに命令したため、晋王朝に帰属しようとしていた人のうちで売られたすべての者は、皆奴隸となることなく平民となることができた。この出来事は智生道人が目の前で実際に見たことである。

# 【語注】

★ 張崇Ⅱ人名。詳細不詳。『晋書』に名前がみえる苻堅や慕容垂に仕えた張崇とは別人だと思われる。補説参照。

★ 苻堅Ⅱ前秦の人。字は永固、諡は宣昭帝。在位は二十七年。五胡中最も強盛と称された。のちに晋に攻め入り、三八三年に謝玄等と淝水で戦い、大敗して還る。『晋書』卷一百一十三、一百一十四に載記あり。

★ 中路Ⅱ道半ば、途中で。『楚辞』「九弁」第五段「然中路而迷惑兮（然く中路に迷惑す）」。

★ 方鎮Ⅱある地域の軍政を掌る軍事長官をいう。『晋書』卷一百二十三慕容垂戴記「垂之在燕、破國亂家、及投命聖朝、蒙超常之遇、忽敢輕侮方鎮、殺吏焚亭、反形已露、終爲亂階（慕容）垂之きて燕に在り、國を破り家を乱し、聖朝に投命するに及び、超常の遇を蒙るも、忽として敢て方鎮を輕侮し、吏を殺し亭を焚き、形に反すること已に露はれ、終に亂階を爲す」。

★ 録Ⅱ拘禁する。なお「爲○○所録」という言い方は、『宋書』『南史』に多くみえる。『宋書』卷八十三黃回伝に「隨質於梁山敗走向豫章、爲臺軍主謝承祖所録（蔵）質を梁山に隨へ敗走して豫章に向かひ、台の軍主謝承祖の録する所と爲る」とあり、陸杲が生きた時代の近い時期によ

く使われた用法とを考えてもよいかもしれない。

★ 伴Ⅱ仲間の意か。『法苑珠林』及び『太平広記』は「崇與同等五人」に作る。それを参考にし、底本は「五伴」に作るため「五人の仲間」と訳した。

★ 二十歩Ⅱ一歩Ⅱ六尺であり、魏・晋では、一尺は約二四センチメートルであるため、約二九メートルとなる。

★ 中夜Ⅱ真夜中。

★ 存亡Ⅱ生きている者と亡くなった者。

★ 十方佛Ⅱ十方世界にある諸仏。「十方」とは東西南北と乾坤良巽こんせんの四隅と上下の総称。「禮十方佛」の語句は『法苑珠林』や『太平広記』ともにみえない。通常は、觀世音一筋であるのに、今回は觀世音だけでは足りず諸仏にも礼拝したというのだから、それほどの悪行に見舞われたということをも、陸奥はしるしなかったのだろうか。

★ 理Ⅱ申し上げる。『後漢書』卷三十八馮緄伝「應奉上疏理緄等、得免（心奉上疏し〔馮〕緄等を理め、免るるを得）」。

★ 行旋Ⅱ他に用例をみない語。「旋」には「まわる」の意味があり、次に「一匝」（匝Ⅱぐるりと一周する）とあることから、ここでは似たような意味の表現が続いていると思われる。

★ 白虎樽Ⅱ蓋に虎の画が描かれた酒樽。『宋書』卷十四礼志

に「正旦元會、設白虎樽於殿庭。樽蓋上施白虎、若有能獻直言者、則發此樽飲酒（正旦の元會に、白虎樽を殿庭に設く。樽蓋の上に白虎を施し、若し能く直言を獻ずる者有らば、則ち此の樽を発して酒を飲む）」とある。これは、春秋・晋の杜蕢かいが、殯かひもがり中の君主平公の非を暗に示すために、侍臣とともに罰杯を飲んだという「杜拳」の故事からきている。「白虎樽」は劉宋時代以前の正史にはみえないが、本話から晋代にも使われていた可能性があらうことがわかる。

★ 冤狀Ⅱ無実の罪の実情。時代が下るため適切な用例ではないかもしれないが、『周書』卷四十六杜叔毗伝に「叔毗朝夕號泣、具申冤狀（杜）叔毗朝夕に号泣し、具さに冤狀を申す」とあり、ここの表現と類似している。

★ 智生道人Ⅱ僧侶の名。『高僧伝』卷五釈曇戒伝に「弟子智生侍疾（弟子智生疾に侍し）」とあることから、釈曇戒の弟子であることがわかる。それ以外の詳細は不明。釈曇戒の生没年がわからないため断言はできないが、釈曇戒の師である釈道安が苻堅の政治顧問となっていたことから、智生道人が生きていた時代も太元年間から大きくず

れることはないだろう。

## 【補説】

まず、『晋書』に載る張崇の記述を以下に示していく。三八三年の淝水の戦いでは、襄陽郡の近くの武当にいて、そこで敗れたことがわかる。

『晋書』卷一百二十四苻堅載記下「晉車騎將軍桓冲率衆十萬伐堅、遂攻襄陽。（中略）堅大怒、遣其子征南叡及冠軍慕容垂・左衛毛當率步騎五萬救襄陽、揚武張崇救武當。後將軍張蚝・步兵校尉姚萇救涪城。叡次新野、垂次鄧城。王師敗張崇於武當、掠二千餘戸而歸（晋の車騎將軍桓冲衆十萬を率ゐて「苻」堅を伐ち、遂に襄陽を攻む。「中略」「苻」堅大いに怒り、其の子征南の叡及び冠軍の慕容垂・左衛の毛當をして歩騎五萬を率ゐる襄陽を救はしめ、武の張崇を揚げて武當を救はしむ。後に將軍張蚝・步兵校尉姚萇涪城を救ふ。叡は新野に次り、「慕容」垂は鄧城に次る。王師張崇を武當に敗り、二千餘戸を掠めて歸る）」。

その後、三八四年に鄧城（山東省）で謝玄に敗れている。

『晋書』卷九帝紀第九孝武帝「（太元九年）九月辛卯、前鋒都督謝玄攻苻堅將兖州刺史張崇于鄧城、克之」（太元九年「三

八四）九月辛卯、前鋒都督謝玄苻堅の將兖州刺史張崇を鄧城に攻め、之に克つ」。

次に、中山郡（河北省）を都としたという慕容垂に仕えたのか、三八六年には彼のもとで吏部尚書となっている。

『晋書』卷一百二十三慕容垂載記「垂定都中山、羣僚勸即尊號、具典儀、修郊燎之禮。垂從之、以太元十一年僭即位、（中略）以其左長史庫辱官偉・右長史段崇・龍驤張崇・中山尹封衡爲吏部尚書（慕容）垂都を中山に定め、羣僚勸めて即ち尊号し、典儀を具へ、郊燎の礼を修む。「慕容」垂之に従ひ、太元十一年「三八六」を以て僭して即位す、「中略」其の左長史の庫辱官偉、右長史の段崇、龍驤の張崇、中山尹の封衡を以て吏部尚書と爲す」

このように北にずっと仕えていた経歴を持つ張崇が、果たして晋に帰属しようとして長江を渡ることがあったのか疑問である。さらに、本話では「関中」の人々が晋に帰属しようとしているが、『晋書』の張崇が淝水の戦いの時期に長安にいたかは確認できず、「関中」にいた人々と行動をとみにできた人物だったのかもわからない。そのため、今回の話の張崇と史書に名前が残っている張崇は別人の可能性が高いだろう。

（中国文学専攻 修士一年 林美江）

## 【本文】

西海太守呉乾鍾者、本奉佛法精進、恒誦『觀世音經』。嘗爲虜所鈔得、縛<sup>(1)</sup>押埋腰、欲走馬射之、以爲觀戲。呉因歸命觀世音、特自苦至。於是天忽大雨、至暝<sup>(4)</sup>不息。虜不能出、悉以氈自覆。呉爾時縛甚急、兼埋在土中、不覺忽自得脫、因爾而走。虜軍覺之、馬騎亂逐<sup>(6)</sup>。相去少許、而策馬終不能及、遂得脫去。

## 【參考資料】

＊『佚名諸菩薩感應抄』（25）

## 【校注】

- （1）底本は「脾」に作る。金剛寺本により改める。
- （2）底本は「歎」に作る。金剛寺本により改める。
- （3）底本は「持」に作る。金剛寺本により改める。
- （4）原本は「賓」に作る。文意により改める。
- （5）底本は「自」に作る。文意により改める。
- （6）底本は「遂」に作る。金剛寺本により改める。

## 【書き下し】

西海太守呉乾鍾は、本より仏法を奉じて精進し、恒に『觀世音經』を誦ず。嘗て虜の鈔め得る所と爲り、押を縛り腰を埋め、馬を走らせて之を射て、以て觀戲と爲さんと欲す。呉因りて觀世音に歸命し、特に自ずから苦だ至る。是に於いて天忽ち大いに雨ふり、暝に至るも息まず。虜出づること能はず、悉く氈を以て自ら覆ふ。呉爾時に縛らるること甚だ急にして、兼ねて埋められて土中に在り、覺えず忽として自ずから脱するを得たり、爾れに因りて走る。虜軍之を覺え、馬騎亂れ逐ふ。相去ること少し許り、馬を策<sup>むち</sup>うつに終に及ぶ能はず、遂に脱し去るを得たり。

## 【訳】

西海郡（江蘇省淮安海州）太守である呉乾鍾は、もともと仏法につとめて精進し、いつも『觀世音經』を誦じていた。かつて、異民族に捕えられたことがあって、異民族たちは呉乾鍾のかいがら骨を縛り腰も土に埋め、馬を走らせてかれの上半身を矢で打ち抜いて、見世物にしてしまおうとした。呉はそこで觀世音に歸命し、特に懇ろであることこの上なかった、すると空から突然大雨が降ってきて、暗くなってもやむこと

がなかった。異民族は外に出ることができず、みな氈を被った。呉はそのとき、とくに固く縛られ、さらに土の中に埋められていたが、知らず知らずのうちに突然縛られて埋められている状況から脱することができるようになり、そこで逃げていった。異民族の軍はこれに気づいて、騎兵が入り乱れつつ追ってきた。お互いの距離はほとんど少ししか離れてはいなかったが、馬をむち打つてもついに呉乾鍾に追いつくことはできず、呉乾鍾は脱出し逃げ去ることができたのである。

### 【語注】

- ＊ 西海Ⅱ西海は一般に現在の青海省を指すが、董書は「劉宋の時代は西海とは江蘇省淮安海州を指す」としている。おそらく、『宋書』巻八明帝本紀七年（四七二）秋七月の「乙酉、於冀州置西海郡」という記述に基づいていると考えられる。董氏が指摘した海州は現在の連雲港市のあたりであり、『中国歴史地図集』第四冊（中国地図出版社一九八二）でも連雲港市の近くに冀州という地名が確認できる。

＊ 呉乾鍾Ⅱ人名。詳細不詳。

＊ 鈔Ⅱ略奪する、とる。『方言』巻十二「虜、鈔強也。皆強

取者也（虜、鈔は強なり。皆強ひて物を取るなり）」。  
＊ 胛Ⅱ背中の上部にあつて腕の骨との連結部にある幅広の骨。かいがらばね。

＊ 観戯Ⅱ「観」は「見る」、「戯」は「たわむれ。おどけ。遊び。冗談」の意。ここでは「見世物」と解釈した。

＊ 氈Ⅱけむしろ。もうせん。毛おりの敷物。

（中国文学専攻 学部三年 長谷川浩平）

〔附記〕本稿は、公益財団法人豊秋奨学会及び科学研究費助成事業基盤研究（B）（一般）「前近代東アジアにおける術数文化の形成と伝播・展開に関する学際的研究」（課題番号16H03466 研究代表者水口幹記）の助成を受けた研究成果の一部である。